

WebSAM DeploymentManager Ver6.1

Windows OS/Service Packに関する対応情報

—第 2 版—

改版履歴

版数	改版日付	改版内容
2	2013/03/11	DPM Ver6.11/6.12リリースに伴い、Windows Server 2012/Windows 8を追記。
1	2012/08/30	新規作成

目次

1. 各OS/Service Pack共通の注意事項	5
2. Windows XP SP2/SP3	6
2.1. Windows XP SP2/SP3を適用したマシンを管理対象とする	6
2.1.1.管理対象マシンにWindows XP SP2/SP3を配信する	6
2.1.1.1.Windows XP SP2の設定	7
2.1.1.2.Windows XP SP2/SP3の登録.....	12
2.1.1.3.Windows XP SP2/SP3の適用.....	16
2.1.2.Windows XP SP2/SP3を適用したマシンでポートを開放する	18
2.2. Windows XP SP2を適用したマシンでWebコンソールを利用する	20
3. Windows Server 2003 SP1/SP2	23
3.1. Windows Server 2003 SP1/SP2を適用したマシンでWebコンソールを利用する.....	23
3.2. Windows Server 2003 SP2を適用したマシンでNFSサーバを利用する	25
3.3. Windows Server 2003 SP1/SP2を適用したマシンでDHCPサーバを利用する	25
3.4. Windows Server 2003 SP1/SP2のマシンを管理対象とする	26
3.4.1.管理対象マシンにWindows Server 2003 SP1/SP2を配信する.....	26
3.4.1.1.Windows Server 2003 SP1/SP2の登録.....	26
3.4.1.2.Windows Server 2003 SP1/SP2の適用.....	30
3.4.2.Windows Server 2003 SP1/SP2を適用したマシンでポートを開放する.....	32
4. Windows Server 2003 R2	33
4.1. Windows Server 2003 R2をインストールしたマシンを管理対象マシンとする	33
4.2. Windows Server 2003 R2をインストールした管理対象マシンでディスク複製を行う.....	33
5. Windows Server 2008/Windows Vista	34
5.1. Windows Server 2008(Full Installation)/Windows Vistaのマシンを管理対象とする.....	34
5.2. Windows Server 2008(Server Coreインストール)のマシンを管理対象とする	38
6. Windows Server 2008(SP1/SP2)/Windows Vista(SP1/SP2)	39
6.1. Windows Server 2008(SP1/SP2)/Windows Vista(SP1/SP2)のマシンを管理対象とする	39
7. Windows Server 2008 R2(SP1含む)	40
7.1. Windows Server 2008 R2(SP1含む)をインストールした管理サーバでポートを開放する.....	40
7.2. Windows Server 2008 R2(SP1含む)をインストールした管理対象マシンでポートを開放する	45
8. Windows 7(SP1含む)	48
9. Windows Server 2012/Windows 8	49

商標について

- ・ WebSAMは日本電気株式会社の登録商標です。
- ・ Microsoftは米国Microsoft Corporationの米国およびその他の国における登録商標または商標です。

はじめに

Windowsの各OSやService Packを適用した環境でDeploymentManagerを動作させるために必要な手順や各環境における注意事項について説明します。

Windows OS/Service Packの対応状況について

以下の表は、管理対象マシンのWindows OS/Service Packの対応状況です。

アーキテクチャ	OS	Service Pack
x86	Windows 2000 Server/Advanced Server/Professional	SPなし/SP1/SP2/SP3/SP4
	Windows Server 2003 Standard Edition/Enterprise Edition	SPなし/SP1/SP2
	Windows Server 2003 R2 Standard Edition/Enterprise Edition	SPなし/SP2
	Windows Server 2008 Standard/Enterprise	SPなし/SP1/SP2
	Windows XP Professional	SPなし/SP1/SP2/SP3
	Windows Vista Business/Enterprise/Ultimate	SPなし/SP1/SP2
	Windows 7 Professional/Ultimate/Enterprise	SPなし/SP1
	Windows 8 Pro/Enterprise	SPなし
x64	Windows Server 2003 Standard x64 Edition/Enterprise x64 Edition/Datacenter x64 Edition	SPなし/SP2
	Windows Server 2003 R2 Standard x64 Edition/Enterprise x64 Edition/Datacenter x64 Edition	SPなし/SP2
	Windows Server 2008 Standard x64/Enterprise x64/Datacenter x64	SPなし/SP1/SP2
	Windows Server 2008 R2 Standard/Enterprise/Datacenter	SPなし/SP1
	Windows Server 2012 Standard/Datacenter	SPなし
	Windows 7 Professional x64/Ultimate x64/Enterprise x64	SPなし/SP1
	Windows 8 Pro x64/Enterprise x64	SPなし

本書で説明のないものも含めてすべてのWindows OS/Service Packについて、DPM サーバ/DPM クライアントをインストール後にファイアウォール機能を有効にした場合など、管理サーバと管理対象マシン間の通信ができなくなる可能性があります。その場合は、DPM で使用するポートを開放する必要があります。以下の章を参考にして、ポートを開放してください。本書に記載のないWindows OS/Service Packについては、その他の注意事項はありません。

管理サーバのポート開放手順については、「7.1 Windows Server 2008 R2(SP1 含む)をインストールした管理サーバでポートを開放する」を参考にしてください。

管理対象マシンのポート開放手順については、以下を参考にしてください。

- ・「2.1.2 Windows XP SP2/SP3 を適用したマシンでポートを開放する」
- ・「5.1 Windows Server 2008(Full Installation)/Windows Vista のマシンを管理対象とする」
- ・「7.2 Windows Server 2008 R2(SP1含む)をインストールした管理対象マシンでポートを開放する」

ヒント

OSの対応状況については、「ファーストステップガイド 3 動作環境」、または以下の製品サイトの動作環境を参照してください。
WebSAM DeploymentManager
(http://www.nec.co.jp/middle/WebSAM/products/deploy_win/index.html)

1. 各 OS/Service Pack 共通の注意事項

OSのバージョンやサービスパックの適用状況によっては、ファイアウォール機能が動作することにより、以下のように管理サーバと管理対象マシン間の通信に失敗する場合があります。

- ・ファイアウォール環境で、マシン起動時に通信できないことが原因で「シナリオ実行」、「DPMクライアントの自動アップグレード」等が失敗します。マシンのファイアウォールサービスを自動起動に設定している場合、ファイアウォール機能の有効/無効に関わらず、マシンが起動してからファイアウォールサービスが起動するまでの間は、すべてのポートが閉じられ通信不可能な状態となります。このため、以下の点に注意してください。
- マシン起動時のタイミングでDPMからシナリオ実行/シャットダウンなどの処理を行うと、マシンとの通信ができないため、処理がエラーとなります。
このような場合は、マシン起動後にWebコンソールで管理対象マシンが電源ONの状態となってからシナリオ実行/シャットダウンなどの操作を行ってください。
- DPMクライアントのバージョンがDPMサーバより前のバージョンの場合には、DPMクライアントの自動アップグレードが実行されます。このタイミングで通信できないと、DPMクライアントの自動アップグレードに失敗します。このような場合は、インストール時に登録済みの「System_AgentUpgrade_Multicast」のシナリオを実行し、エラーが発生したマシンのDPMクライアントをアップデートしてください。
- ・DPMを用いてNEC Express5800シリーズ向けのWindows RUR(リビジョンアップリリース)モジュールを適用する場合は、適用対象のマシンに任意のユーザでログインし、スクリーンセーバが起動していない状態でシナリオを実行する必要があります。ログインしていてもマシンのロック状態や、適用中にスクリーンセーバが起動した場合、自動インストールが継続できない可能性があります。

2. Windows XP SP2/SP3

DPMでWindows XP Service Pack 2/Service Pack 3(以降はWindows XP SP2/SP3と記載します。)を適用した環境のマシンを使用される場合の手順と注意事項について説明します。

Windows XP SP2では、セキュリティ機能が大幅に強化されています。

その中のファイアウォール機能は、Windows XP SP2適用後にほぼすべての通信をブロックします。

Windows XP SP3については、Service Pack適用によってポートが閉じることはないため、ここでは適用手順についてのみ説明します。

ヒント

- Windows XP SP2/SP3についての詳細は、以下のサイトを参照してください。
 - ・Microsoft Windows XP SP2
(<http://www.microsoft.com/japan/windowsxp/sp2/default.mspx>)
 - ・Microsoft Windows XP SP3
(<http://www.microsoft.com/ja-jp/windows/products/windowsxp/sp3/default.aspx>)
- ファイル名などでSP2の記載のある箇所はSP3に読み替えてください。

2.1. Windows XP SP2/SP3 を適用したマシンを管理対象とする

Windows XP SP2/SP3に関する手順については、本章を参照してください。

Windows XP SP3については仕様によりSP3を適用する条件として、SP1または、SP2が適用済みである必要があります。(サービスパック適用なしの環境にSP3は適用できません。)

- ・SP3のパッケージ登録時には、「2.1.1.2 Windows XP SP2/SP3の登録」を参照して、「依存情報」タブを設定してください。
- ・DPMの自動更新機能を使用する場合は、管理サーバに複数のサービスパックのパッケージが登録されていると最新のサービスパックのパッケージを配信します。
サービスパックを適用していない管理対象マシンが存在する場合は、前述のSP3の仕様により、適用されません。
サービスパックを適用していない管理対象マシンにSP3を適用する場合は次の手順で配信してください。
 - SP3のパッケージを未登録の場合
SP1または、SP2を自動更新機能で配信してください。その後にSP3を登録してください。
 - SP3のパッケージを登録済みの場合
SP1または、SP2をシナリオで配信してください。その後にSP3は自動更新機能で配信されます。

2.1.1. 管理対象マシンに Windows XP SP2/SP3 を配信する

管理対象マシンにWindows XP SP2/SP3を適用する方法について説明します。

Windows XP SP2を適用すると、ファイアウォールによって管理サーバとの通信ができなくなります。配信後に手動でポートを開放することもできますが、Windows XP SP2に用意されている機能を使って、配信と同時にポートを開放できます。ここでは、その方法について説明します。

Windows XP SP3については適用によってポートが閉じることはないため、ここでは登録/適用手順についてのみ説明します。

ヒント

- 手動でポートを開放する手順については、「2.1.2 Windows XP SP2/SP3を適用したマシンでポートを開放する」を参照してください。
- 配信と同時にポートを開放する設定を行わなかった場合、シナリオ実行は「シナリオ実行エラー」となります。

DPMを使用したWindows XP SP2/SP3の適用方法について、以下の手順で説明します。

2.1.1.1 Windows XP SP2の設定

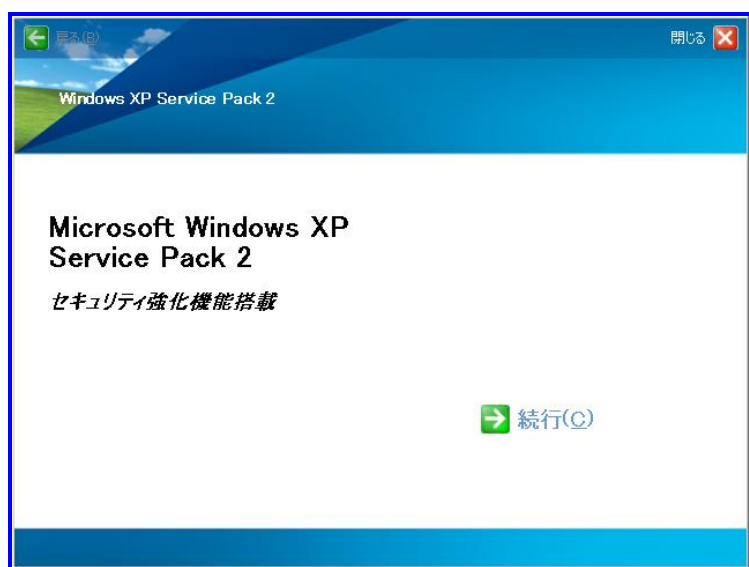
2.1.1.2. Windows XP SP2/SP3の登録

2.1.1.3. Windows XP SP2/SP3の適用

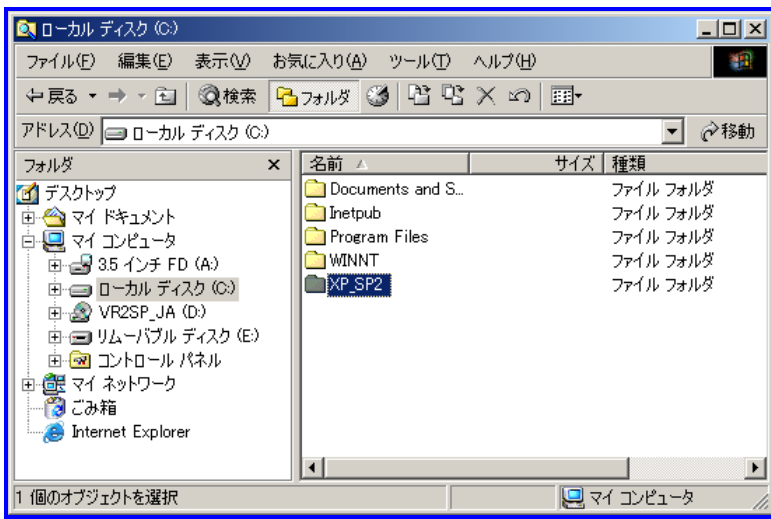
2.1.1.1. Windows XP SP2 の設定

DPMからの通信を可能にするため、管理対象マシンにWindows XP SP2を適用する前にカスタマイズする手順を説明します。なお、SP3をDPMで適用する際は、このカスタマイズは不要です。

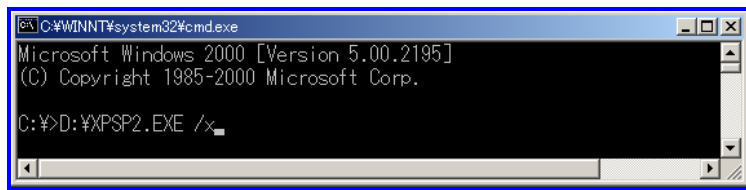
- (1) Windows XP SP2 CD-ROMをCD-ROMドライブにセットします。
インストール画面が起動しますが「閉じる」ボタンをクリックして終了させてください。WebサイトなどからダウンロードしたWindows XP SP2をご使用の場合は、格納しているパスを読み替えてください。



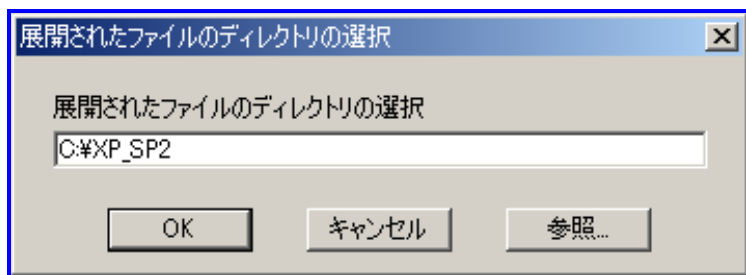
- (2) ファイルを展開する展開先フォルダを作成します。
 エクスプローラなどから任意の名前のフォルダを作成します。
 ここでは例としてCドライブ直下に「XP_SP2」というフォルダを作成します。



- (3) 「スタート」メニューから「ファイル名を指定して実行」を選択し、「cmd」と入力して「OK」ボタンをクリックします。コマンドプロンプトが起動しますので、以下を実行してください。
 例)CD-ROMドライブがDドライブの場合
 D:¥XPSP2.EXE /x



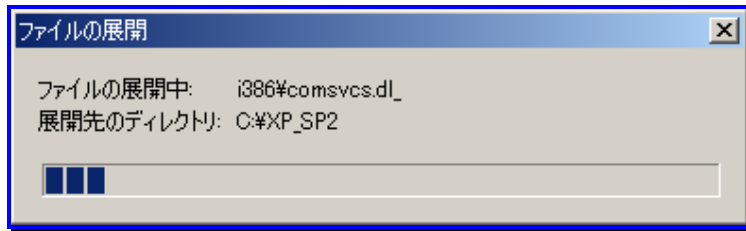
- (4) 展開先のフォルダに、(2)で作成したフォルダを指定し、「OK」ボタンをクリックします。



注意

指定したフォルダには「XPSP2.EXE」が含まれないようにしてください。含んだ状態でイメージビルダに登録すると、展開前と展開後の両方のフォルダが含まれてしまい、ファイルサイズが2倍になります。

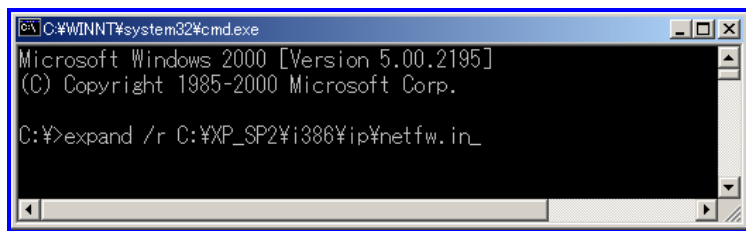
- (5) 「ファイルの展開」が始まりますので、そのまましばらくお待ちください。



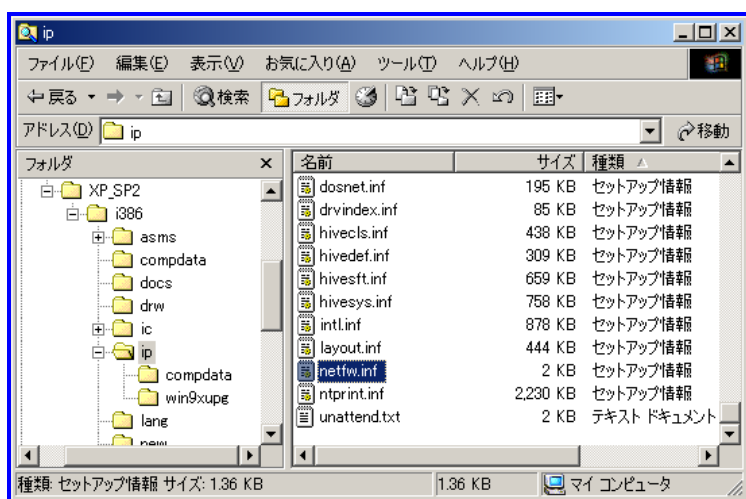
- (6) 「ファイルの展開」が終了すると完了画面が表示されますので「OK」ボタンをクリックします。



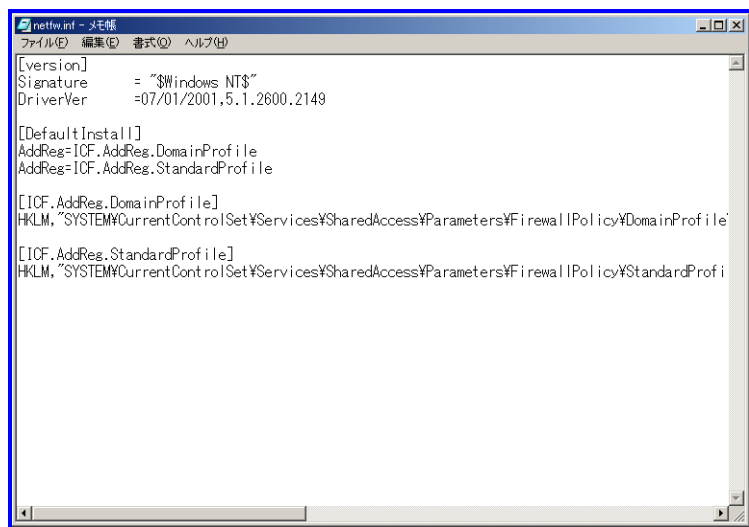
- (7) 任意に作成した展開先のフォルダ内に含まれる「netfw.in_」ファイルを展開します。
コマンドプロンプトで以下を実行してください。
例)Cドライブ直下に「XP_SP2」というフォルダを作成し、展開した場合
expand /r C:¥XP_SP2¥i386¥ip¥netfw.in_



- (8) 展開が終わると、C:¥XP_SP2¥i386¥ip配下に「netfw.inf」ファイルが作成されますので、メモ帳などで開いてください。



(9) 「netfw.inf」ファイルの内容は、以下のとおりです。



```
netfw.inf - メモ帳
ファイル(F) 編集(E) 書式(O) ヘルプ(H)

[version]
Signature       = "$Windows NT$"
DriverVer       = 07/01/2001,5.1.2600.2149

[DefaultInstall]
AddReg=ICF.AddReg.DomainProfile
AddReg=ICF.AddReg.StandardProfile

[ICF.AddReg.DomainProfile]
HKLM,"SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥SharedAccess¥Parameters¥Firewall¥DomainProfile"

[ICF.AddReg.StandardProfile]
HKLM,"SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥SharedAccess¥Parameters¥Firewall¥StandardProfile"
```

(10) 「ICF.AddReg.DomainProfile」と「ICF.AddReg.StandardProfile」の下に、それぞれ以下の**太字部分**を追加し、上書き保存してください。
設定方法には<個別にポートを開放する>方法と<ファイアウォールを無効にする>方法があります。運用にあわせて選択してください。

注意

太字部分を追加する際、下文からコピー/貼り付けを行うと、行の途中で改行が入ります。各行の先頭が次のような形式で始まるように、改行は削除してください。

```
[[CF.AddReg.DomainProfile]
  HKLM,"SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥SharedAccess¥Parameters.....
  HKLM,"SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥SharedAccess¥Parameters.....
```

<個別にポートを開放する>

```
[ICF.AddReg.DomainProfile]
HKLM,"SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥SharedAccess¥Parameters¥FirewallPolicy¥DomainProfile¥AuthorizedApplications¥List","%windir%¥system32¥sessmgr.exe",0x00000000,"%windir%¥system32¥sessmgr.exe*:enabled:@xpsp2res.dll,-22019"

HKLM,"SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥SharedAccess¥Parameters¥FirewallPolicy¥DomainProfile¥Icmpsettings","AllowInboundEchoRequest",0x00010001,1

HKLM,"SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥SharedAccess¥Parameters¥FirewallPolicy¥DomainProfile¥AuthorizedApplications¥List","%windir%¥system32¥DepAgent.exe",0x00000000,"%windir%¥system32¥DepAgent.exe*:Enabled:DeploymentManager(DepAgent.exe)"

HKLM,"SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥SharedAccess¥Parameters¥FirewallPolicy¥DomainProfile¥AuthorizedApplications¥List","%windir%¥system32¥rupdsvc.exe",0x00000000,"%windir%¥system32¥rupdsvc.exe*:Enabled:DeploymentManager(rupdsvc.exe)"

[ICF.AddReg.StandardProfile]
HKLM,"SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥SharedAccess¥Parameters¥FirewallPolicy¥StandardProfile¥AuthorizedApplications¥List","%windir%¥system32¥sessmgr.exe",0x00000000,"%windir%¥system32¥sessmgr.exe*:enabled:@xpsp2res.dll,-22019"

HKLM,"SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥SharedAccess¥Parameters¥FirewallPolicy¥StandardProfile¥Icmpsettings","AllowInboundEchoRequest",0x00010001,1

HKLM,"SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥SharedAccess¥Parameters¥FirewallPolicy¥StandardProfile¥AuthorizedApplications¥List","%windir%¥system32¥DepAgent.exe",0x00000000,"%windir%¥system32¥DepAgent.exe*:Enabled:DeploymentManager(DepAgent.exe)"

HKLM,"SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥SharedAccess¥Parameters¥FirewallPolicy¥StandardProfile¥AuthorizedApplications¥List","%windir%¥system32¥rupdsvc.exe",0x00000000,"%windir%¥system32¥rupdsvc.exe*:Enabled:DeploymentManager(rupdsvc.exe)"
```

<ファイアウォールを無効にする>

```
[ICF.AddReg.DomainProfile]
HKLM,"SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥SharedAccess¥Parameters¥FirewallPolicy¥DomainProfile¥AuthorizedApplications¥List","%windir%¥system32¥sessmgr.exe",0x00000000,"%windir%¥system32¥sessmgr.exe*:enabled:@xpsp2res.dll,-22019"

HKLM,"SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥SharedAccess¥Parameters¥FirewallPolicy¥DomainProfile","DoNotAllowExceptions",0x00010001,0

HKLM,"SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥SharedAccess¥Parameters¥FirewallPolicy¥DomainProfile","EnableFirewall",0x00010001,0

[ICF.AddReg.StandardProfile]
HKLM,"SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥SharedAccess¥Parameters¥FirewallPolicy¥StandardProfile¥AuthorizedApplications¥List","%windir%¥system32¥sessmgr.exe",0x00000000,"%windir%¥system32¥sessmgr.exe*:enabled:@xpsp2res.dll,-22019"

HKLM,"SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥SharedAccess¥Parameters¥FirewallPolicy¥StandardProfile","DoNotAllowExceptions",0x00010001,0

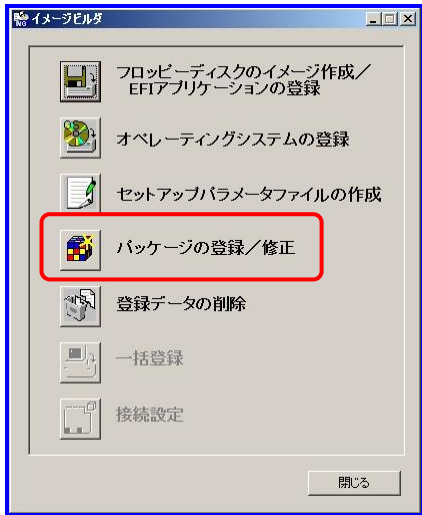
HKLM,"SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥SharedAccess¥Parameters¥FirewallPolicy¥StandardProfile","EnableFirewall",0x00010001,0
```

以上で、Windows XP SP2の設定は完了です。

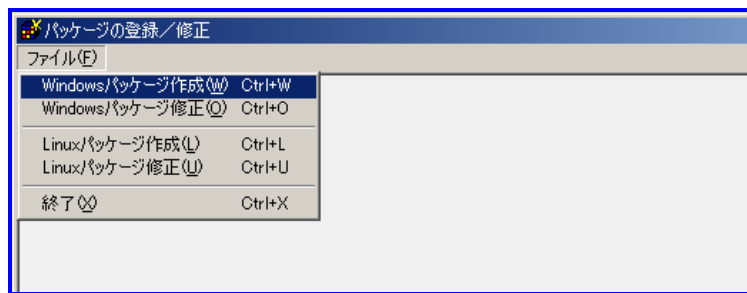
2.1.1.2. Windows XP SP2/SP3 の登録

Windows XP SP2/SP3をDPMにパッケージとして登録する手順を説明します。
ここでは、イメージビルダでWindows XP SP2/SP3のパッケージを登録する方法について説明します。

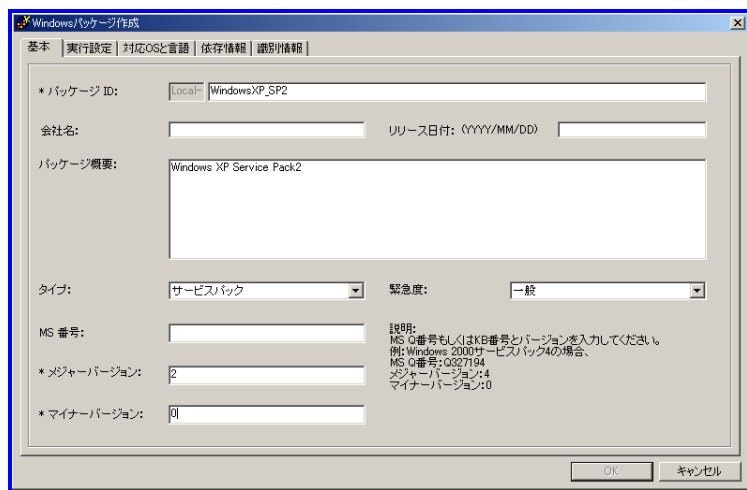
- (1) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダ」を選択し、起動したイメージビルダから「パッケージの登録／修正」をクリックします。



- (2) 「ファイル」メニューから→「Windowsパッケージ作成」をクリックします。



- (3) 「Windowsパッケージ作成」画面が表示されます。まず「基本」タブの項目を入力します。



- **パッケージ ID**
パッケージにつけるID番号を入力します。63Byte以内で入力します。入力できる文字は、半角英数と以下の記号です。
_ -
- **会社名**
パッケージを発行する発行元の名称を入力します。127Byte以内で入力します。
- **リリース日**
パッケージをリリースした日付を入力します。西暦/月/日の書式で入力します。年は4桁、月と日は2桁で入力してください。
無効な値を入力すると、無視される、または自動的に補正されます。
- **パッケージ概要**
パッケージの概要情報を入力します。511Byte以内で入力します。
- **タイプ**
サービスパックをリストボックスから選択します。
- **緊急度**
パッケージの緊急度(4種類)を設定します。
サービスパックの場合、デフォルトは、「一般」です。(※1)
- **MS 番号**
サービスパックの場合、「MS 番号」「識別情報」の入力は不要です。
- **メジャーバージョン**
サービスパックの場合は必ず入力してください。Windows XP SP2の場合は「2」、SP3の場合は「3」を入力します。
- **マイナーバージョン**
サービスパックの場合は必ず入力してください。Windows XP SP2/SP3の場合は「0」を入力します。

※1

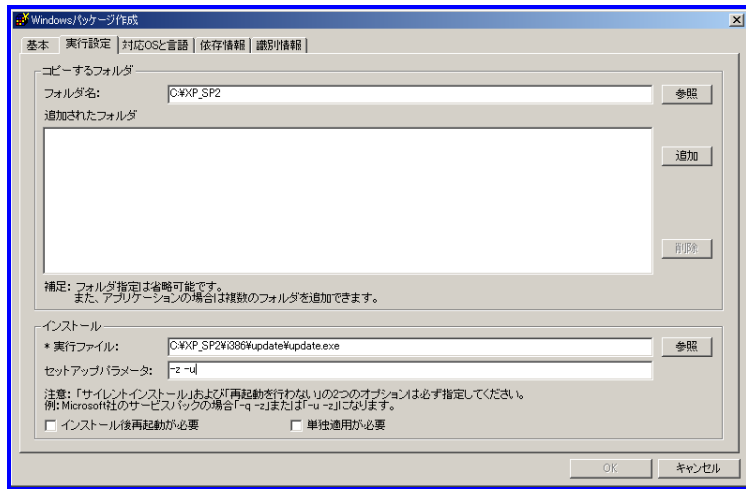
パッケージの緊急度を設定します。緊急度の種類により配信手順が以下の表のように異なります。

緊急度	マシンの電源状態	配信手順
最高	電源ONのマシン	適用可の管理対象マシンに即時配信します。
	電源OFFのマシン	起動時にパッケージの適用状態を判断して配信します。
高	電源ONのマシン	あらかじめ管理サーバ側で指定した時刻に配信します。
	電源OFFのマシン	起動時にパッケージの適用状態を判断して配信します。
一般/低		管理サーバ側でシナリオを作成し、手動で配信します。

重要

自動更新によりサービスパックを適用する場合は、「最高」または「高」を選択してください。
シナリオを作成してサービスパックを適用する場合は、「一般」または「低」を選択してください。

(4) 「実行設定」タブの項目を入力します。



- フォルダ名
サービスパックが展開されたフォルダを指定します。SP2の場合には、「Windows XP SP2の設定」で作成した展開フォルダを指定してください。
- 追加されたフォルダ
フォルダ名を入力後に「追加」ボタンをクリックし、「追加されたフォルダ」リストボックスにフォルダを追加します。
- 実行ファイル
展開フォルダ内の「update.exe」を指定します。「参照」ボタンをクリックして指定できます。

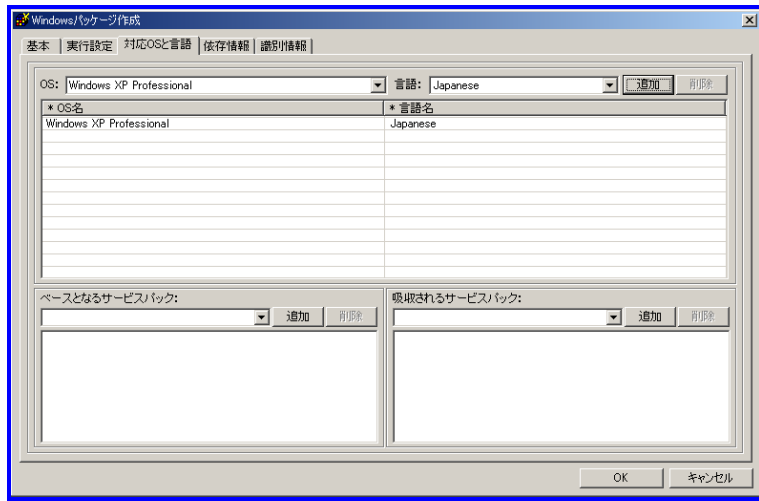
注意

Microsoftから提供されるサービスパックの仕様によっては、実行パスに2バイト文字が含まれると処理が正常に行われない可能性があります。サービスパックを格納する「コピー元フォルダ名」は1バイト文字で作成されることを推奨します。

- セットアップパラメータ
「-z」と、「-u」または「-q」を指定します。OEM固有のドライバがインストールされている場合は「-o」も指定します。パラメータのそれぞれの意味は以下になります。

「-z」: 実行後に再起動を行わないようにします。必ず指定してください。
「-u」: 無人モードで更新します。シナリオ実行中、自動更新中にエラーが発生した場合は、シナリオ実行、自動更新が停止し、管理サーバ上では「シナリオ実行中」もしくは「パッチ適用中」のままとなります。
「-q」: Quietモードで実行します。シナリオ実行中、自動更新中にエラーとなった場合でもそのまま次へ進みます。そのため管理サーバ上でシナリオ実行完了となっても適用されていない場合があります。
「-o」: OEM固有のドライバがインストールされている場合に指定してください。コマンドプロンプトを表示せずに処理を実行します。
「/h」、または「-?」: オプションの情報を表示します。
- インストール後再起動が必要
パッケージの適用後に再起動を行う場合に設定します。
- 単独適用が必要
単独での適用が必要な場合に設定します。チェックを入れると適用前に自動で再起動を行います。

(5) 「対応OSと言語」タブの項目を入力します。



- OS
Windows XP Professionalを選択します。
- 言語
Japaneseを選択し「追加」ボタンをクリックして、リストに追加します。
- ベースとなるサービスパック
設定する必要はありません。
- 吸収されるサービスパック
設定する必要はありません。

(6) SP3の場合には、「依存情報」タブの項目を入力します。

SP3の仕様によりSP3を適用する条件として、SP1または、SP2が適用済みである必要があります。(サービスパック適用なしの環境にSP3は適用できません。)ノパッケージの適用条件となる「依存情報」タブの「レジストリ条件」に以下の1.を指定したパッケージと、2.を指定したパッケージをそれぞれ作成してください。

1.SP1適用済み環境にSP3を適用する場合に指定するレジストリ条件

キー名: HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Microsoft¥Windows NT¥CurrentVersion
名前: CSDVersion
データ: Service Pack 1
Type: REG_SZ
条件: 存在する

2.SP 2適用済み環境にSP3を適用する場合に指定するレジストリ条件

キー名: HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Microsoft¥Windows NT¥CurrentVersion
名前: CSDVersion
データ: Service Pack 2
Type: REG_SZ
条件: 存在する

なお、上記の「レジストリ条件」を簡略化して指定できます。「レジストリ条件」に以下を指定したパッケージを一つ作成してください。(上記のように、サービスパック毎にパッケージを作成する必要はありません。)

キー名: HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Microsoft¥Windows NT¥CurrentVersion
名前: CSDVersion
条件: 存在する

- (7) 必要な項目を入力したら「OK」ボタンをクリックします。
パッケージ情報ファイルの作成が始まりますのでしばらくお待ちください。

以上で、Windows XP SP2/SP3のパッケージ登録は完了です。

■ PackageDescriber上でパッケージを登録する場合は、PackageDescriberを起動し、「ファイル」メニュー→「パッケージの作成」をクリックします。さらに上記の手順を参考に必要な項目を入力し、登録を行ってください。

PackageDescriberの詳しい操作方法については、「リファレンスガイド 6 PackageDescriber」を参照してください。

2.1.1.3. Windows XP SP2/SP3 の適用

登録したサービスパックのパッケージを適用するには、以下の方法があります。

- ・管理者が選別したパッチ/アプリケーションを強制的に管理対象マシンにインストールする。(シナリオ方式)
- ・あらかじめ定義した条件に従って自動的にパッチ/アプリケーションを管理対象マシンにインストールする。(自動更新方式)

重要

シナリオ方式でサービスパックのパッケージを配信する場合はパッケージの登録時に緊急度を「一般」または「低」に設定してください。
自動更新方式でサービスパックのパッケージ配信する場合はパッケージの登録時に緊急度を「最高」または「高」に設定してください。

パッケージWebサーバから管理サーバにパッケージを定期的にダウンロードする方法については、「オペレーションガイド 4.3 複数のDPMサーバへのパッケージ登録を自動化する」を参照してください。

ここでは、シナリオ方式によりパッケージを配信する方法について説明します。

(1) Webコンソールより「シナリオ追加」画面を表示します。

(2) 「パッケージ」タブをクリックし、「パッケージ」グループボックスから「2.1.1.2 Windows XP SP2/SP3の登録」で登録したパッケージを選択し、シナリオを作成します。

■ 最大ターゲット数

マルチキャストのリモートアップデートによる実行のみ設定が有効となります。

同じシナリオを割り当てられたマシンに対して、ここで指定した数だけ準備が整うとリモートアップデートが開始されます。

注意

- 最大ターゲット数を越えてシナリオを実行した場合、最大ターゲット数を越えてシナリオ実行したマシンはシナリオ実行エラーとなります。いったん、マシンに対して「エラー解除」を実行し、シナリオ実行エラーを解除してください。その後、シナリオの最大ターゲット数を適切な値に調整してシナリオ実行を行ってください。
- 「管理」ビュー→「DPMサーバ」アイコン→「詳細設定」画面→「ネットワーク」タブの同時実行可能台数を超える場合は、同時実行可能台数の値を変更してください。
- 「ユニキャストでデータを送信する」を選択した場合、最大ターゲット数は無視されます。

■ 最大待ち時間

マルチキャストのリモートアップデートによる実行のみ設定が有効となります。

ここで指定した待ち時間を過ぎると、実行可能な状態となっているマシンのみリモートアップデートが開始されます。

重要

- アップデートの実行は、シナリオの実行を指示後、実行準備の完了したマシンが最大ターゲット数と同じ台数になるか、最大待ち時間が経過するまで待機します。待機中のマシンに対してただちにアップデートを実行する機能はありません。
- 最大ターゲット数、最大待ち時間の両方とも指定しない場合は、シナリオ実行後、他のマシンを待たずに即実行します。

注意

「ユニキャストでデータを送信する」を選択した場合、最大待ち時間は無視されます。

■ 実行タイミング設定

「配信後すぐにパッケージを実行」を選択した場合は、シナリオ実行してデータの配信後すぐにアップデートが開始されます。

「次回起動時にパッケージを実行」を選択した場合は、シナリオ実行してデータの配信だけ行って、次回マシンを起動したときにアップデートが開始されます。

重要

「次回起動時にパッケージを実行」を選択した場合は下記に注意してください。

- ・「オプション」タブの「シナリオ終了時に対象マシンの電源をOFFにする」にチェックを入れた場合、アップデート完了後にマシンの電源がOFFされるのではなく、データの配信後にマシンの電源がOFFされます。
- ・マシンが次回起動時のアップデート中に、パッケージのシナリオ実行を行った場合はシナリオ実行エラーとなります。シナリオ実行する場合は、アップデートの完了後に再度行ってください。

ヒント

再起動前の管理対象マシンには、以下を指定したシナリオを合計100個実行できます。101個以上のシナリオを実行する場合は、管理対象マシンを再起動してください。再起動することにより新たに100個のシナリオを実行できます。

- ・「パッケージ」タブの「次回起動時にパッケージを実行」

■ パッケージ実行後に再起動を行う

リモートアップデートによる実行のみ設定が有効となります。

リモートアップデートの実行完了後にマシンの再起動を行う場合に選択します。

■ ユニキャストでデータを送信する

リモートアップデートによる実行のみ設定が有効となります。

ユニキャストでデータを送信する場合に選択します。

ヒント

- 「マルチキャストでデータを送信する」を選択した場合はマルチキャストを使用してデータを送信します。以下のシナリオを複数実行するときは、マルチキャストIPアドレスを変更してください。

-サービスパック/HotFix/アプリケーションをリモートアップデートにより適用するシナリオ

-リストアのシナリオ

マルチキャストIPアドレスの設定は、「パッケージ」タブの「配信条件設定」で変更できます。

- ルータを越えた別セグメントのネットワークにアップデートを行う際など、マルチキャストのデータが送信できない場合に「ユニキャストでデータを送信する」を選択してください。

(3) シナリオ実行時のシナリオ実行条件を設定する場合は、「オプション」タブをクリックしてください。シナリオ実行後にマシンの電源をOFFにしたい場合は、「シナリオ終了時に対象マシンの電源をOFFにする」にチェックを入れてください。

ヒント

リモートアップデートのシナリオを実行する場合は、「シナリオ開始時に対象マシンのOSを再起動する」チェックボックスにチェックを入れないでください。チェックを入れてシナリオ実行した場合でも、マシンの再起動は行われません。

(4) シナリオ名を付けて「OK」ボタンをクリックします。これで、シナリオ一覧に新しくWindows XP SP2/SP3適用のシナリオが追加されます。

(5) 作成したシナリオを対象のマシンに割り当て、シナリオを実行します。

以上で、シナリオによる管理対象マシンへのWindows XP SP2/SP3の適用は完了です。

2.1.2. Windows XP SP2/SP3 を適用したマシンでポートを開放する

Windows XP SP2を適用したマシンをDPMで管理するため、手動でポートを開放する手順について説明します。

通常、DPMクライアントのインストール時に実行される「ポート開放ツール」でポートを自動開放しますが、DPMクライアントをインストール後にWindows XP SP2を適用すると自動開放したポートが閉じられてしまうため手動で開放する必要があります。

※Windows XP SP3適用時には、ポートは閉じられません。

また、DPMクライアントをインストール後にファイアウォール機能を有効にするなど、管理サーバと管理対象マシン間の通信ができなくなる場合がありますので、DPMで使用するポートを手動で開放する必要があります。

以下にポート開放手順について説明します。

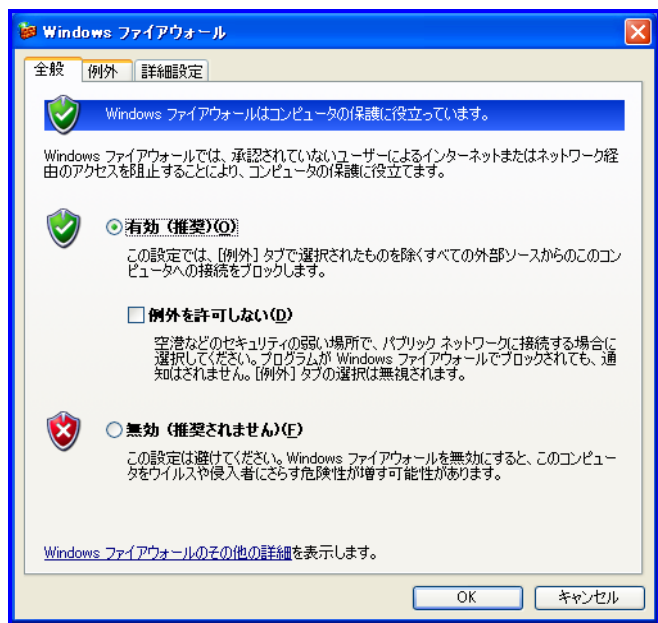
トント

DPMを使ってWindows XP SP2を配信する手順については、「2.1.1 管理対象マシンにWindows XP SP2/SP3を配信する」を参照してください。

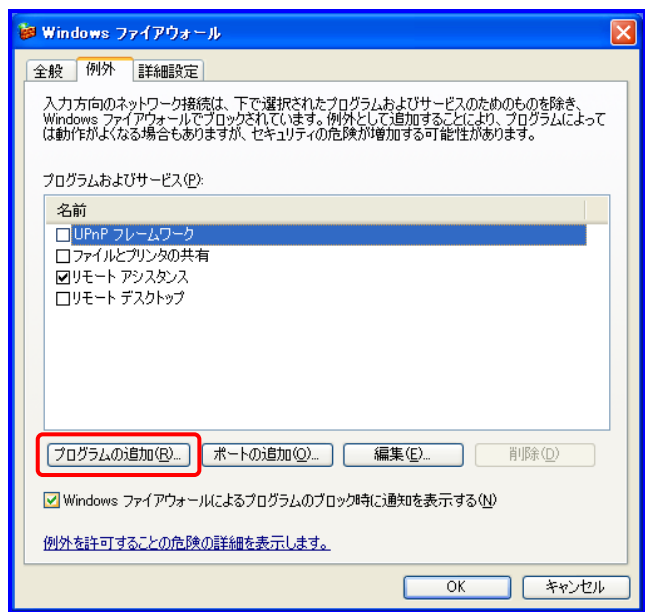
注意

管理対象マシンでファイアウォールサービスを自動起動に設定している場合、ファイアウォール機能の有効/無効に関わらず、マシン起動からファイアウォールサービスが起動するまでの間はすべてのポートが閉じられています。このためこのタイミングでシナリオ実行/電源状態取得/シャットダウンなどのDPMからの命令を発行すると失敗します。

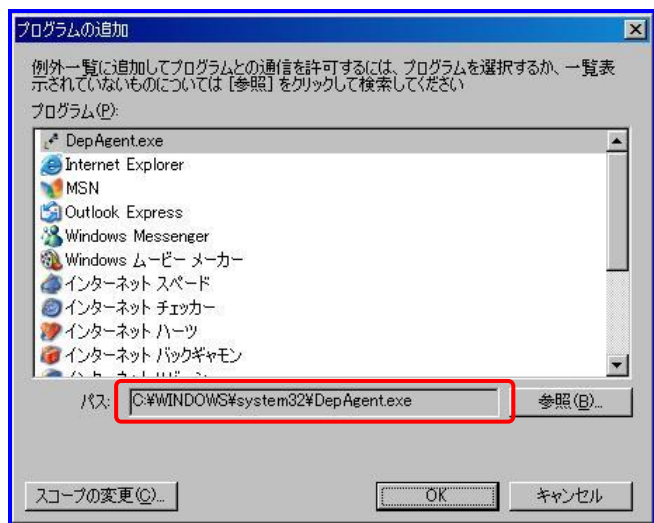
- (1) 管理対象マシンで使用するポートを手動で開放します。
「スタート」メニューから「コントロールパネル」→「セキュリティセンター」→「Windowsファイアウォール」をクリックします。
以下の画面が表示されますので「例外」タブをクリックします。



(2) 「例外」タブの「プログラムの追加」ボタンをクリックします。



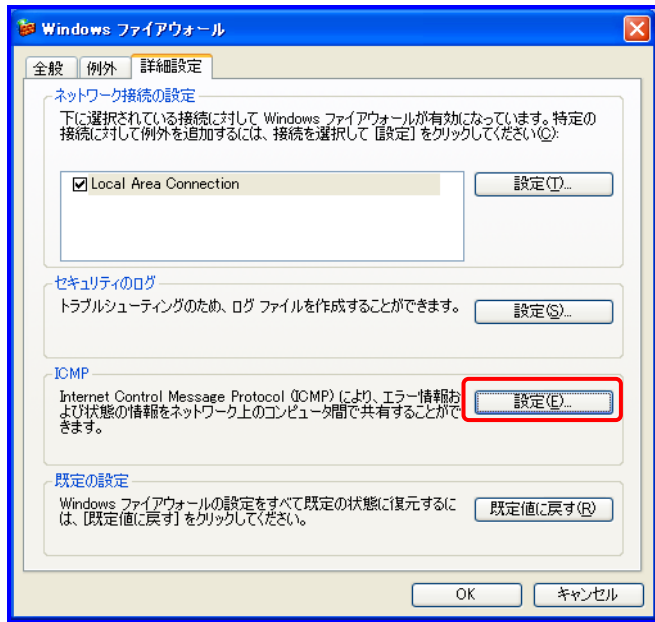
(3) 「プログラムの追加」画面が表示されますので、下表に記載のプログラムを指定して、「OK」ボタンをクリックします。同様の手順で、下表に記載のすべてのプログラムを追加してください。
例) DepAgent.exeを追加する場合: 「パス」に<DPMクライアントのインストールフォルダ>%DepAgent.exeを指定



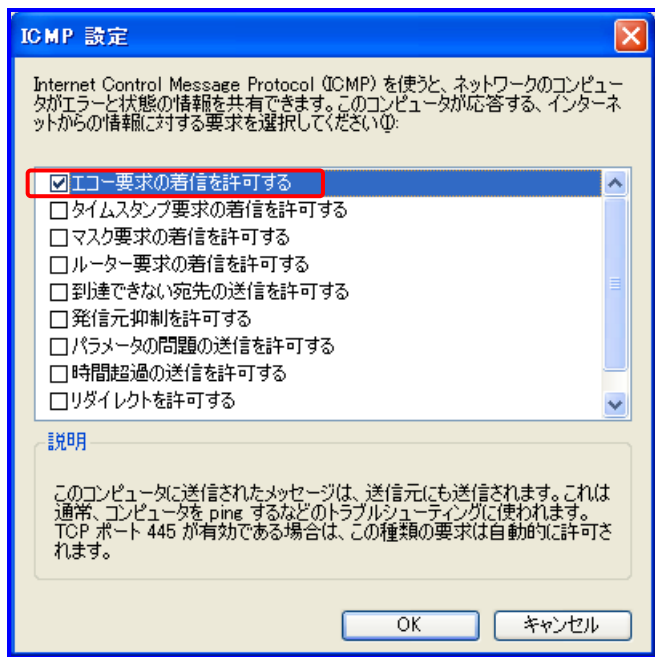
■ 開放するポート一覧

プログラム	プロトコル
DepAgent.exe	TCP/UDP
rupdsvc.exe	TCP/UDP

- (4) 次に「詳細設定」タブをクリックし、「ICMP」グループボックス下の「設定」ボタンをクリックします。



- (5) 「ICMP設定」画面が表示されるので「エコー要求の着信を許可する」チェックボックスにチェックを入れ、「OK」ボタンをクリックします。



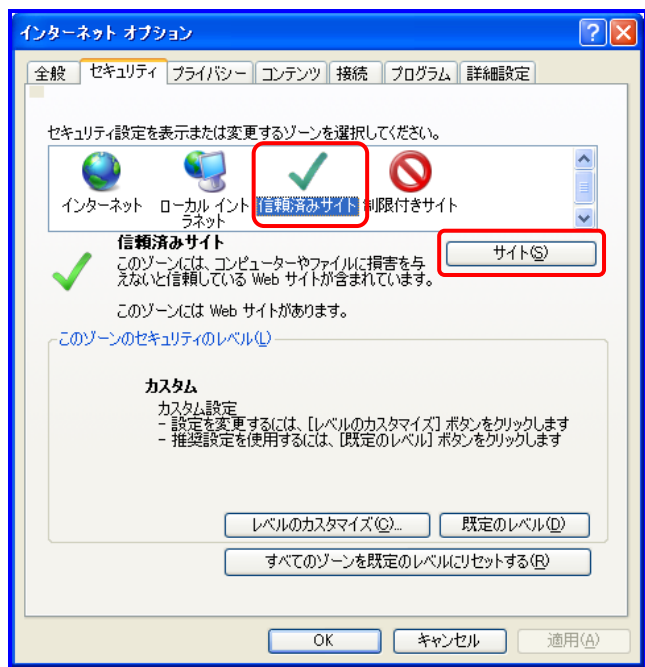
以上で、Windows XP SP2を適用したマシンをDPMで管理するための設定は完了です。

2.2. Windows XP SP2 を適用したマシンで Web コンソールを利用する

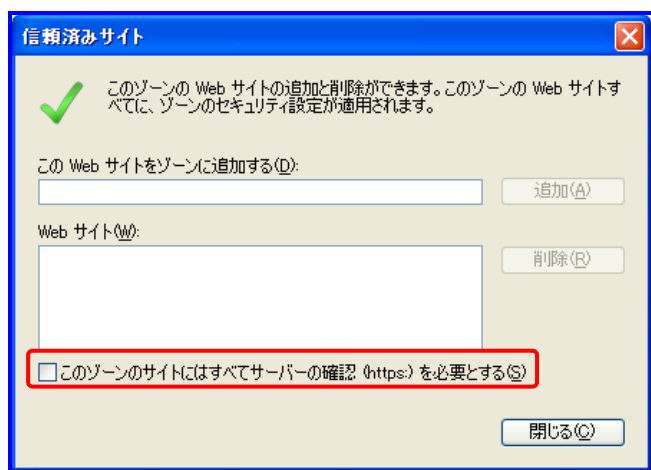
Windows XP SP2を適用したマシンでWebコンソールを利用するには、DPMサーバを信頼済みサイトに追加する必要があります。

◆DPMサーバを信頼済みサイトに追加する場合

- (1) 「スタート」メニューから「コントロールパネル」→「セキュリティセンター」→「インターネットオプション」をクリックします。「インターネットのプロパティ」画面が表示されますので、「セキュリティ」タブをクリックし、「信頼済みサイト」にフォーカスをあてた状態で「サイト」ボタンをクリックします。

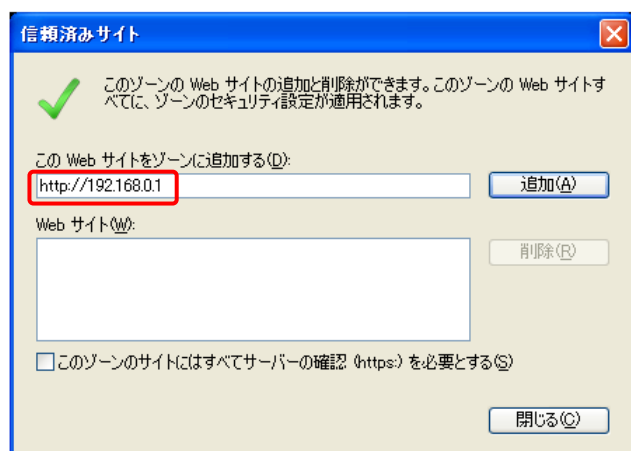


- (2) 「信頼済みサイト」画面が表示されますので、「このゾーンのサイトにはすべてサーバーの確認 (https:) を必要とする」チェックボックスのチェックを外してください。

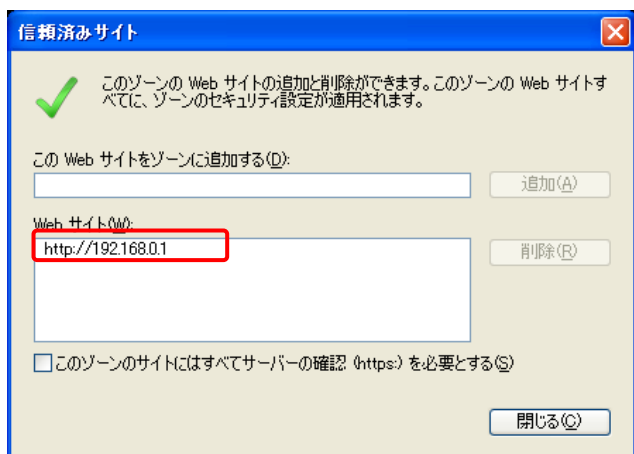


- (3) 「この Web サイトをゾーンに追加する」にDPMサーバのIPアドレス、またはマシン名を入力し、「追加」ボタンをクリックします。

例)DPMサーバのIPアドレスが「192.168.0.1」の場合



- (4) 「Web サイト」に(3)の内容が追加されたことを確認して、「閉じる」ボタンをクリックしてください。



以上で、Windows XP SP2を適用したマシンでWebコンソールを利用するための設定は完了です。

3. Windows Server 2003 SP1/SP2

DPMでWindows Server 2003 Service Pack 1/Service Pack 2(以降はWindows Server 2003 SP1/SP2と記載します。)を適用した環境のマシンを使用される場合の手順と注意事項について説明します。

Windows Server 2003 SP1/SP2では、セキュリティ機能が大幅に強化されています。

このため、Windows Server 2003 SP1/SP2適用後にDPMを利用する場合は、通信設定する必要があります。

ここでは、DPMを使用したWindows Server 2003 SP1/SP2の適用方法と、Windows Server 2003 SP1/SP2が適用されたマシンでDPMを利用する際の設定項目について説明します。

注意

Windows Server 2003は、SP1から導入されたセキュリティ更新(Post-Setup Security Updates:PSSU)により、最新の更新プログラムが適用されるまでは、すべての着信トラフィックがブロックされます。
Windows Updateなどにより管理対象マシンを最新の状態に更新、またはPSSUを手動で解除してください。PSSUを手動で解除するには、管理者でログインし、セキュリティ更新の画面を閉じてください。

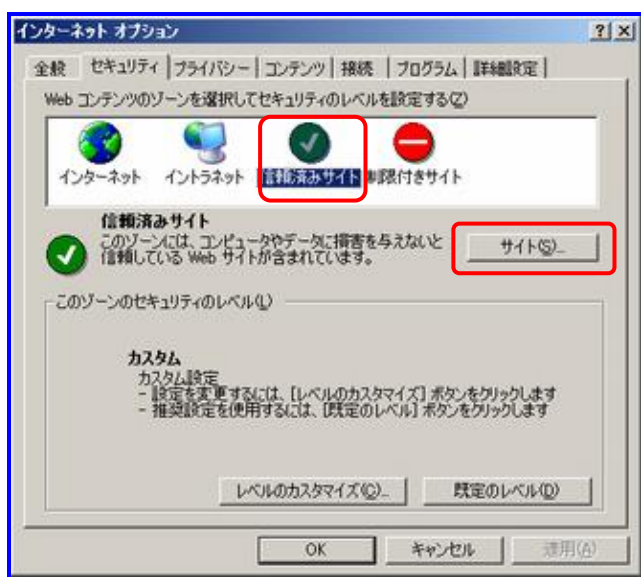
ヒント

Windows Server 2003 SP1/SP2 については、以下のサイトを参照してください。
Microsoft Windows Server 2003 Service Pack
(<http://technet.microsoft.com/ja-jp/windowsserver/gg634794>)

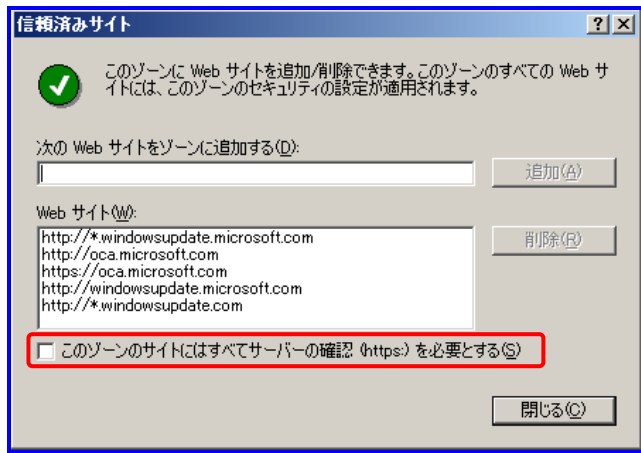
3.1. Windows Server 2003 SP1/SP2 を適用したマシンで Web コンソールを利用する

Windows Server 2003 SP1/SP2を適用したマシンでWebコンソールを利用する場合は、以下の手順で通信設定してください。

- (1) 「スタート」メニューから「コントロールパネル」→「インターネットオプション」をクリックします。
「インターネット オプション」画面が表示されますので、「セキュリティ」タブをクリックし、「信頼済みサイト」を選択した状態で「サイト」ボタンをクリックします。

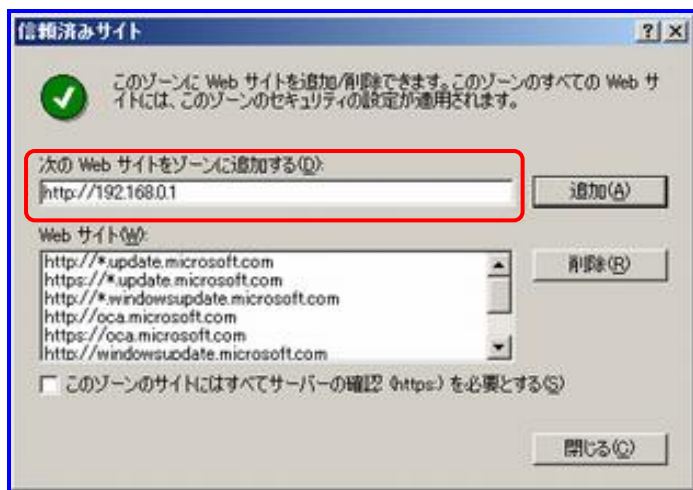


- (2) 「信頼済みサイト」画面が表示されますので、「このゾーンのサイトにはすべてサーバの確認(https:)を必要とする」チェックボックスのチェックを外してください。

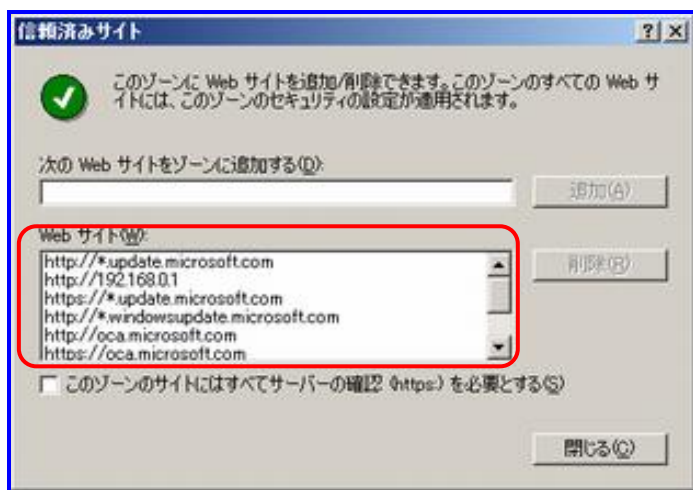


- (3) 「次の Web サイトをゾーン追加する」に DPM サーバの IP アドレス、またはマシン名を入力し、「追加」ボタンをクリックします。

例)DPMサーバのIPアドレスが「192.168.0.1」の場合



- (4) 「Web サイト」に(3)の内容が追加されたことを確認して、「閉じる」ボタンをクリックしてください。



以上で、Windows Server 2003 SP1/SP2を適用したマシンでWebコンソールを利用するための設定は完了です。

3.2. Windows Server 2003 SP2 を適用したマシンで NFS サーバを利用する

Windows Server 2003 SP2を適用したマシンで、OSクリアインストールする場合は、以下の手順でNFSサーバの通信設定してください。

(設定画面については、「2.1.2 Windows XP SP2/SP3を適用したマシンでポートを開放する」を参考にしてください。)

- (1) NFS サーバで使用するポートを手動で開放します。
「スタート」メニューから「コントロールパネル」→「セキュリティセンター」→「Windowsファイアウォール」をクリックします。画面が表示されますので、「例外」タブをクリックします。
- (2) 「例外」タブの「ポートの追加」ボタンをクリックします。
- (3) 「ポートの追加」画面が表示されますので、下表に記載の各ポート番号とプロトコルを指定して、「OK」ボタンをクリックします。

ポート番号	プロトコル
111	TCP
111	UDP
1048(※)	TCP
1048(※)	UDP
2049	TCP
2049	UDP

※このポート番号は動的に変更される場合があります。もし通信に失敗する場合は、「rpcinfo -p」コマンドで mountd(NFS mount daemon)サービスが使用するポート番号を確認し、そのポートを開放するようにしてください。

この方法によっても改善されない場合は、Windowsファイアウォールの設定を無効にしてください。

以上で、Windows Server 2003 SP2を適用したマシンでNFSサーバを利用するための設定は完了です。

3.3. Windows Server 2003 SP1/SP2 を適用したマシンで DHCP サーバを利用する

サードパーティ製のDHCPサーバをWindows Server 2003 SP1/SP2にインストールしてご利用の場合は、以下の手順で通信設定してください。

(設定画面については、「2.1.2 Windows XP SP2/SP3を適用したマシンでポートを開放する」を参考にしてください。)

- (1) DHCP サーバで使用するポートを手動で開放します。
「スタート」メニューから「コントロールパネル」→「セキュリティセンター」→「Windowsファイアウォール」をクリックします。画面が表示されますので、「例外」タブをクリックします。
- (2) 「例外」タブの「ポートの追加」ボタンをクリックします。
- (3) 「ポートの追加」画面が表示されますので、「名前」には「DHCP(UDP67)」、「ポート番号」には「67」を入力し、「UDP」を選択して、「OK」ボタンをクリックします。

以上で、Windows Server 2003 SP1/SP2を適用したマシンでサードパーティ製DHCPサーバを利用するための設定は完了です。

3.4. Windows Server 2003 SP1/SP2 のマシンを管理対象とする

3.4.1. 管理対象マシンに Windows Server 2003 SP1/SP2 を配信する

DPMを使用して管理対象マシンにWindows Server 2003 SP1/SP2を配信する方法について説明します。ファイル名などWindows Server 2003 SP1のものを例として記述しています。その場合は、SP1の記載をSP2に適宜読み替えてください。

3.4.1.1. Windows Server 2003 SP1/SP2 の登録

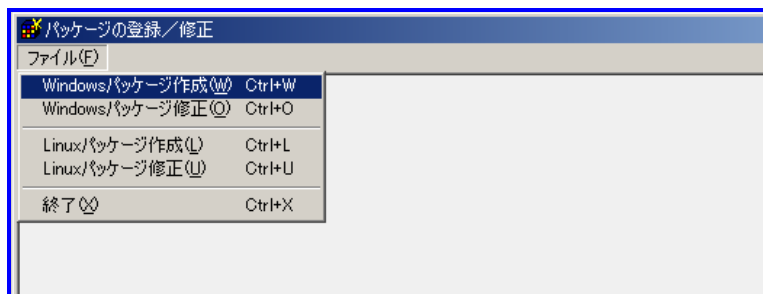
Windows Server 2003 SP1/SP2をDPMにパッケージとして登録する手順を以下に説明します。

ここでは、イメージビルダでWindows Server 2003 SP1/SP2のパッケージを登録する方法について説明します。

- (1) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダ」を選択し、起動したイメージビルダから「パッケージの登録／修正」をクリックします。



- (2) 「ファイル」メニュー→「Windows パッケージ作成」をクリックします。



(3) 「Windows パッケージ作成」画面が表示されます。まず「基本」タブの項目を入力します。

- **パッケージ ID**
パッケージにつける ID 番号です。半角英数と「-」、「_」63 バイト以内で入力します。パッケージ ID は必ず入力してください。
- **会社名**
パッケージを発行する発行元の名称です。127 バイト以内で入力します。
- **リリース日**
パッケージをリリースした日付を入力します。西暦/月/日の書式で入力します。
- **パッケージ概要**
パッケージの概要情報を入力します。511 バイト以内で入力します。
- **タイプ**
サービスパックを選択してください。
- **緊急度**
パッケージの緊急度(4種類)を設定します。

緊急度	マシンの電源状態	配信手順
最高	電源ONのマシン	適用可のクライアントに即時配信します。
	電源OFFのマシン	起動時にパッケージの適用状態を判断して配信します。
高	電源ONのマシン	あらかじめ管理サーバ側で指定した時刻に配信します。
	電源OFFのマシン	起動時にパッケージの適用状態を判断して配信します。
一般/低		管理サーバ側でシナリオを作成し、手動で配信します。

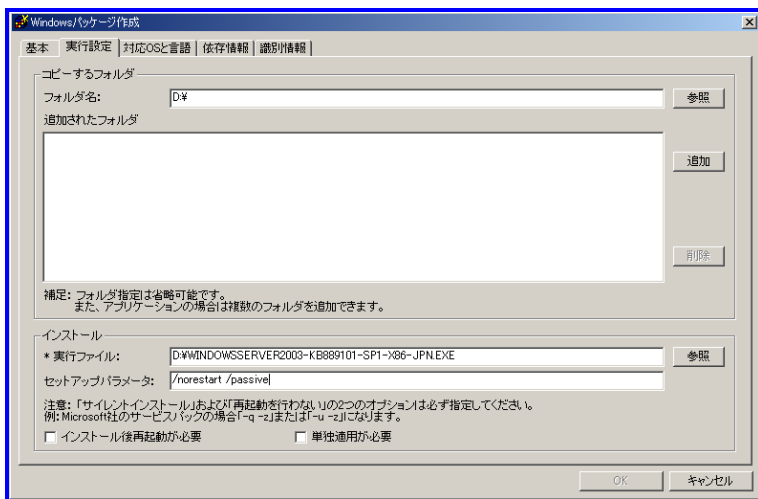
重要

自動更新によりサービスパックを適用する場合は、「最高」または「高」を選択してください。
シナリオを作成してサービスパックを適用する場合は、「一般」または「低」を選択してください。

- **MS 番号**
Microsoft 社が発行するサービスパックや HotFix にあらかじめ付けられている MS(KB)番号を 31 バイト以内で入力します。サービスパックの場合は入力する必要はありません。

- **メジャーバージョン**
サービスパックの場合は必ず入力してください。Windows Server 2003 SP1 の場合は「1」、SP2 の場合は「2」を入力します。
- **マイナーバージョン**
サービスパックの場合は必ず入力してください。Windows Server 2003 SP1/SP2 の場合は「0」を入力します。

(4) 「実行設定」タブの項目を入力します。



- **フォルダ名**
Windows Server 2003 SP1/SP2 のインストールファイルが格納されたフォルダを指定します。「参照」ボタンをクリックして指定できます。
- **追加されたフォルダ、「追加」ボタン**
フォルダ名を入力後に「追加」ボタンをクリックし、「追加されたフォルダ」リストボックスにフォルダを追加します。
- **実行ファイル**
Windows Server 2003 SP1/SP2 のインストールファイルを指定します。「参照」ボタンをクリックして指定できます。
例)
フォルダ名¥WINDOWSSERVER2003-KB889101-SP1-X86-JPN.EXE

注意

Microsoftから提供されるサービスパックの仕様によっては、実行パスに2バイト文字が含まれると処理が正常に行われないう可能性があります。サービスパックを格納する「フォルダ名」は1バイト文字で作成されることを推奨します。

- **セットアップパラメータ**
「/norestart」と、「/passive」または「/quiet」を指定します。
パラメータのそれぞれの意味は以下になります。
「/norestart」: 実行後に再起動を行わないようにします。必ず指定してください。
「/passive」: 無人モードで更新します。シナリオ実行中、自動更新中にエラーが発生した場合は、シナリオ実行、自動更新が停止し、管理サーバ上では「シナリオ実行中」もしくは「パッチ適用中」のままとなります。
「/quiet」: Quietモードで実行します。シナリオ実行中、自動更新中にエラーとなった場合でもそのまま次へ進みます。そのため管理サーバ上でシナリオ実行完了となっても適用されていない場合があります。

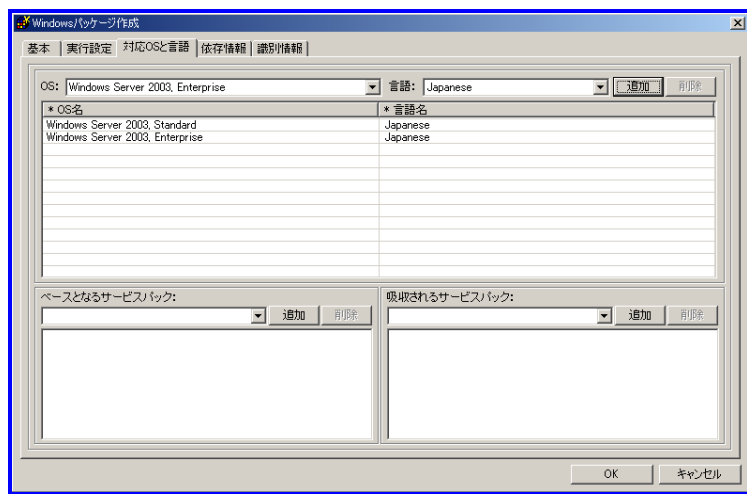
これらのオプションは、サービスパックを「/h」または「-?」のオプションをつけて実行するか、配布元のホームページなどで調べることができます。

注意

サービスパック、ハードウェアのマニュアルを参照した上で指定してください。

- インストール後再起動が必要
パッケージの適用後に再起動を行う場合に設定します。
- 単独適用が必要
単独での適用が必要な場合に設定します。チェックを入れると適用前に自動で再起動を行います。

(5) 「対応 OSと言語」タブの項目を入力します。



- OS
Windows Server 2003 Enterprise/Windows Server 2003 Standard を選択します。
- 言語
Japanese を選択し「追加」ボタンをクリックして、リストに追加します。
- ベースとなるサービスパック
設定する必要はありません。
- 吸収されるサービスパック
設定する必要はありません。

(6) 必要な項目を入力したら「OK」ボタンをクリックします。
パッケージ情報ファイルの作成が始まりますのでしばらくお待ちください。

以上で、Windows Server 2003 SP1/SP2のパッケージ登録は完了です。

- PackageDescriber上でパッケージを登録する場合は、PackageDescriber画面の「ファイル」メニュー→「パッケージの作成」をクリックします。上記の手順を参考に必要な項目を入力して、登録してください。
PackageDescriberの詳しい操作方法については、「リファレンスガイド 6.PackageDescriber」を参照してください。

3.4.1.2. Windows Server 2003 SP1/SP2 の適用

登録したサービスパックのパッケージを適用するには、以下の方法があります。

- ・管理者が選別したパッチ/アプリケーションを強制的に管理対象マシンにインストールする。(シナリオ方式)
- ・あらかじめ定義した条件に従って自動的にパッチ/アプリケーションを管理対象マシンにインストールする。(自動更新方式)

重要

シナリオ方式でサービスパックのパッケージを配信する場合はパッケージの登録時に緊急度を「一般」または「低」に設定してください。
自動更新方式でサービスパックのパッケージ配信する場合はパッケージの登録時に緊急度を「最高」または「高」に設定してください。

パッケージWebサーバから管理サーバにパッケージを定期的にダウンロードする方法については、「オペレーションガイド 4.3 複数のDPMサーバへのパッケージ登録を自動化する」を参照してください。ここでは、シナリオを作成し、パッケージを配信する方法について説明します。

- (1) Webコンソールより「シナリオ追加」画面を表示します。
- (2) 「パッケージ」タブをクリックし、「パッケージ」グループボックスから「3.4.1.1 WindowsServer 2003 SP1/SP2 の登録」で登録したパッケージを選択し、シナリオを作成します。

■ 最大ターゲット数

マルチキャストのリモートアップデートによる実行のみ設定が有効となります。

同じシナリオを割り当てられたマシンに対して、ここで指定した数だけ準備が整うとリモートアップデートが開始されます。

注意

- 最大ターゲット数を越えてシナリオを実行した場合、最大ターゲット数を越えてシナリオ実行したマシンはシナリオ実行エラーとなります。いったん、マシンに対して「エラー解除」を実行し、シナリオ実行エラーを解除してください。その後、シナリオの最大ターゲット数を適切な値に調整してシナリオ実行を行ってください。
- 「管理」ビュー→「DPMサーバ」アイコン→「詳細設定」画面→「ネットワーク」タブの同時実行可能台数を超える場合は、同時実行可能台数の値を変更してください。
- 「ユニキャストでデータを送信する」を選択した場合、最大ターゲット数は無視されます。

■ 最大待ち時間

マルチキャストのリモートアップデートによる実行のみ設定が有効となります。

ここで指定した待ち時間を過ぎると、実行可能な状態となっているマシンのみリモートアップデートが開始されます。

重要

- アップデートの実行は、シナリオの実行を指示後、実行準備の完了したマシンが最大ターゲット数と同じ台数になるか、最大待ち時間が経過するまで待機します。待機中のマシンに対してただちにアップデートを実行する機能はありません。
- 最大ターゲット数、最大待ち時間の両方とも指定しない場合は、シナリオ実行後、他のマシンを待たずに即実行します。

注意

「ユニキャストでデータを送信する」を選択した場合、最大待ち時間は無視されます。

■ 実行タイミング設定

リモートアップデートによる実行のみ設定が有効となります。

「配信後すぐにパッケージを実行」を選択した場合は、シナリオ実行してデータの配信後すぐにアップデートが開始されます。

「次回起動時にパッケージを実行」を選択した場合は、シナリオ実行してデータの配信だけ行って、次回マシンを起動したときにアップデートが開始されます。

重要

「次回起動時にパッケージを実行」を選択した場合は下記に注意してください。

- ・「オプション」タブの「シナリオ終了時に対象マシンの電源をOFFにする」にチェックを入れた場合、アップデート完了後にマシンの電源がOFFされるのではなく、データの配信後にマシンの電源がOFFされます。
- ・マシンが次回起動時のアップデート中に、パッケージのシナリオ実行を行った場合はシナリオ実行エラーとなります。シナリオ実行する場合は、アップデートの完了後に再度行ってください。

ヒント

再起動前の管理対象マシンには、以下を指定したシナリオを合計100個実行できます。101個以上のシナリオを実行する場合は、管理対象マシンを再起動してください。再起動することにより新たに100個のシナリオを実行できます。

- ・「パッケージ」タブの「次回起動時にパッケージを実行」

■ パッケージ実行後に再起動を行う

リモートアップデートによる実行のみ設定が有効となります。

リモートアップデートの実行完了後にマシンの再起動を行う場合に選択します。

■ ユニキャストでデータを送信する

リモートアップデートによる実行のみ設定が有効となります。

ユニキャストでデータを送信する場合に選択します。

ヒント

- 「マルチキャストでデータを送信する」を選択した場合はマルチキャストを使用してデータを送信します。以下のシナリオを複数実行するときは、マルチキャストIPアドレスを変更してください。

- サービスパック/HotFix/アプリケーションをリモートアップデートにより適用するシナリオ
- リストアのシナリオ

マルチキャストIPアドレスの設定は「パッケージ」タブの「配信条件設定」で変更できます。

- ルータを越えた別セグメントのネットワークにアップデートを行う際など、マルチキャストのデータが送信できない場合に「ユニキャストでデータを送信する」を選択してください。

(3) シナリオ実行時のシナリオ実行条件を設定する場合は、「オプション」タブをクリックしてください。シナリオ実行後にマシンの電源をOFFにしたい場合は、「シナリオ終了時に対象マシンの電源をOFFにする」にチェックを入れてください。

ヒント

サービスパック/HotFix/アプリケーションをインストールするシナリオを実行する場合は、「シナリオ開始時に対象マシンのOSを再起動する」チェックボックスにチェックを入れないでください。チェックを入れてシナリオ実行した場合でも、マシンは再起動しません。

(4) シナリオ名を付けて「OK」ボタンをクリックします。これで、シナリオ一覧に新しくWindows Server 2003 SP1/SP2 適用のシナリオが追加されます。

(5) 作成したシナリオを対象の装置に割り当て、シナリオを実行します。

以上で、シナリオによる管理対象マシンへのWindows Server 2003 SP1/SP2の適用は完了です。

3.4.2. Windows Server 2003 SP1/SP2 を適用したマシンでポートを開放する

Windows Server 2003 SP1/SP2を適用したマシンをDPMで管理するため、手動でポートを開放する手順について説明します。

Windows Server 2003 SP1/SP2のデフォルトでは、ファイアウォール機能は無効になっていますが、DPMクライアントをインストール後にファイアウォール機能を有効にした場合、管理サーバと管理対象マシン間の通信ができなくなりますので、DPMで使用するポートを開放する必要があります。

「2.1.2 Windows XP SP2/SP3を適用したマシンでポートを開放する」を参照し、DPMで使用するポートや「ポート開放ツール」では自動開放しないポートを手動開放してください。

注意

マシンでファイアウォールサービスを自動起動に設定している場合、ファイアウォール機能の有効/無効に関わらず、マシン起動からファイアウォールサービスが起動するまでの間はすべてのポートが閉じられています。このためこのタイミングでシナリオ実行、電源状態取得、シャットダウンなどのDPMからの命令を発行すると失敗します。

4. Windows Server 2003 R2

Windows Server 2003 R2 をインストールしたマシンでの適用方法、注意事項について説明します。

注意

Windows Server 2003 R2は、セキュリティ更新(Post-Setup Security Updates:PSSU)により、最新の更新プログラムが適用されるまでは、すべての着信トラフィックがブロックされます。Windows Updateなどにより管理対象マシンを最新の状態に更新、もしくは、PSSUを手動で解除してください。PSSUを手動で解除するには、管理者でログインし、セキュリティ更新の画面を閉じてください。

ヒント

- ファイアウォール機能(Windows Server 2003 R2 のデフォルトでは、ファイアウォール機能は無効になっています。)を使用する場合や、サービスパックの適用については、「3 Windows Server 2003 SP1/SP2」を参考にしてください。
- Windows Server 2003 R2 についての詳細は、以下のサイトを参照してください。
<http://technet.microsoft.com/ja-jp/windowsserver/bb512919>

4.1. Windows Server 2003 R2 をインストールしたマシンを管理対象マシンとする

Windows Server 2003 R2をインストールしたマシンを管理対象マシンとする場合、以下の注意事項があります。

注意

シナリオ実行後、Webコンソールのマシンのプロパティ画面では以下のように表示されます。
オペレーティングシステム: Microsoft Windows Server 2003 XXXX Edition
サービスパック: ServicePack 1

4.2. Windows Server 2003 R2 をインストールした管理対象マシンでディスク複製を行う

注意

ディスク複製によるOSセットアップの際に、マスタマシンでSysprepコマンドを実行すると「Windows セキュリティの重要な警告」ダイアログが表示され"Microsoft Remote Desktop Help Session Manager"の通信がブロックされていると通知される場合があります。暫くすると自動的に続行されますので問題はありません。

5. Windows Server 2008/Windows Vista

DPMでWindows Server 2008/Windows Vistaのマシンを管理対象マシンとする場合の手順と注意事項について説明します。

Windows Server 2008/Windows Vista では、セキュリティ機能が大幅に強化されています。

ここでは、Windows Server 2008/Windows VistaのWindowsファイアウォールを有効に設定したマシンで、DPMを利用する際の設定項目について説明します。

注意

- マシンでファイアウォールサービスを自動起動に設定している場合、ファイアウォール機能の有効/無効に関わらず、マシン起動からファイアウォールサービスが起動するまでの間はすべてのポートが閉じられています。このためこのタイミングでシナリオ実行、電源状態取得、シャットダウンなどのDPMからの命令を発行すると失敗します。
- Windows Server 2008(Full Installation)/Windows Vistaを管理対象とする場合には、以下の注意事項を確認して、ご利用ください。
 - ・WinREが第1パーティション以外にインストールされているディスクをダイナミックディスクに変換した場合、WinREパーティションがバックアップされないことがあります。そのバックアップイメージをリストアした場合、WinREパーティションが復元されません。
 - ・BitLockerドライブ暗号化が有効になっているマシンのバックアップ/リストアはできません。

ヒント

Windows Server 2008(Full Installation)/Windows Vista を DPM で管理する場合は、「5.1 Windows Server 2008(Full Installation)/Windows Vista のマシンを管理対象とする」を参照してください。

Windows Server 2008(Server Core インストール)の場合は、「5.2 Windows Server 2008(Server Core インストール)のマシンを管理対象とする」を参照してください。

5.1. Windows Server 2008(Full Installation)/Windows Vista のマシンを管理対象とする

Windows Server 2008(Full Installation)/Windows VistaをインストールしたマシンをDPMで管理するため、手動でポートを開放する手順について説明します。

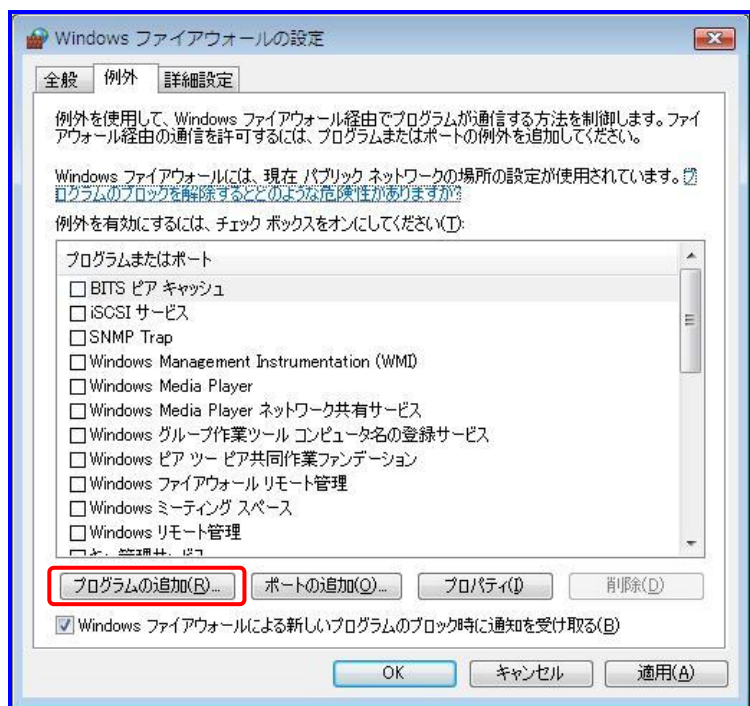
通常、ファイアウォール機能を有効にした状態では、DPMクライアントのインストール時に実行される「ポート開放ツール」で、ポートを自動開放しますが、DPMクライアントをインストール後にファイアウォール機能を有効にした場合など、管理サーバと管理対象マシン間の通信ができなくなる場合がありますので、DPMで使用するポートを開放する必要があります。

以下にポート開放手順について説明します。

- (1) 管理対象マシンで使用するポートを手動で開放します。
「スタート」メニューから「コントロールパネル」→「セキュリティ-Windows ファイアウォールによるプログラムの許可」をクリックします。



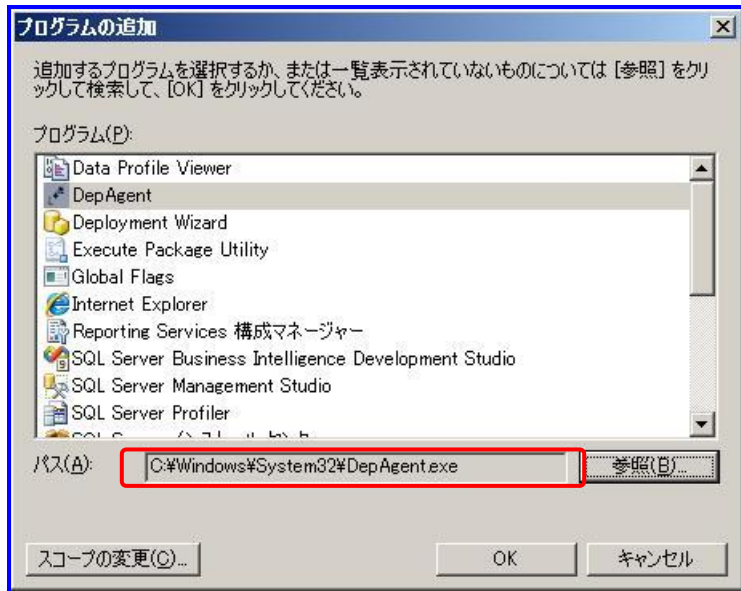
- (2) 「Windows ファイアウォールの設定」画面の「例外」タブが表示されますので、「プログラムの追加」ボタンをクリックします。



- (3) 「プログラムの追加」画面が表示されますので、下表に記載のプログラムを指定して、「OK」ボタンをクリックします。

同様の手順で、下表に記載のすべてのプログラムを追加してください。

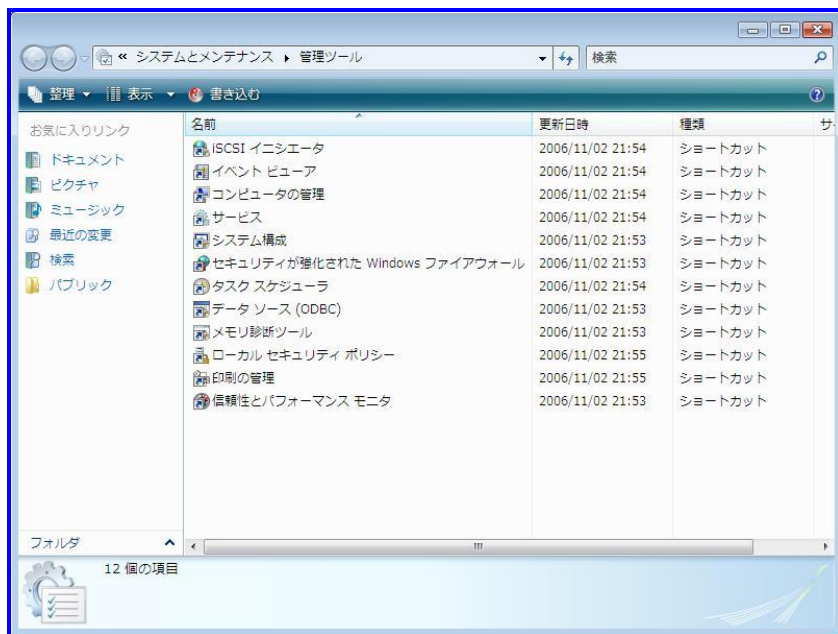
例) DepAgent.exe を追加する場合: 「パス」に <DPM クライアントのインストールフォルダ>¥DepAgent.exe を指定



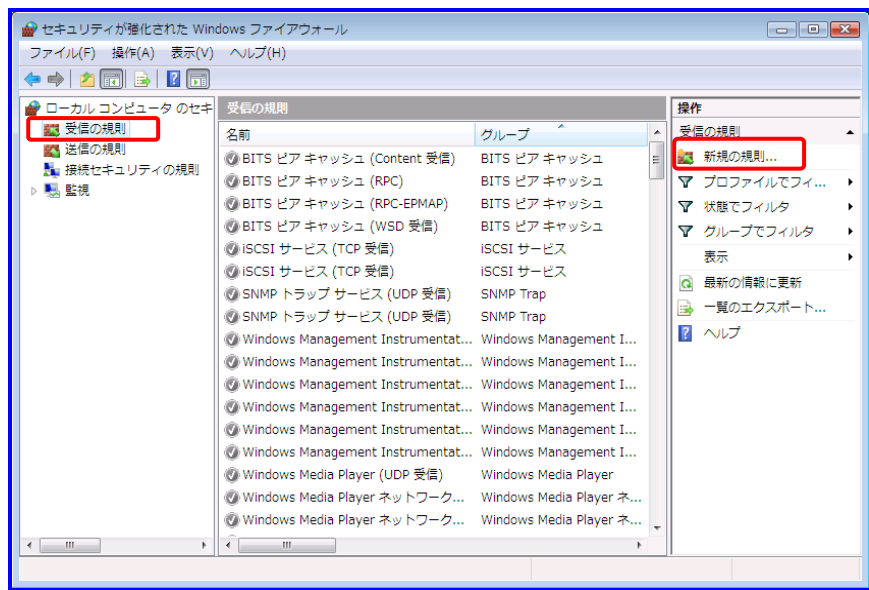
■ 開放するポート一覧

プログラム	プロトコル
DepAgent.exe	TCP/UDP
rupdsvc.exe	TCP/UDP

- (4) 次に「コントロールパネル」→「システムとメンテナンス」→「管理ツール」から「セキュリティが強化された Windows ファイアウォール」を選択します。



- (5) 「セキュリティが強化された Windows ファイアウォール」画面が表示されますので、画面左側の「受信の規則」を選択後、画面右側の「新規の規則...」を選択します。



- (6) 「新規の受信の規則ウィザード」が表示されますので、以下の情報を入力します。
(以降の手順で設定する情報は参考値であり、環境により変更が必要な場合があります。)



ステップ	選択する内容
規則の種類	カスタム
プログラム	すべてのプログラム
プロトコルおよびポート	プロトコルの種類: ICMPv4 インターネット制御メッセージ プロトコル(ICMP)の設定: 「カスタマイズ」ボタンをクリックすると「ICMP 設定のカスタマイズ」画面が表示されますので、「特定の種類のICMP」で、「エコー要求」にチェックを入れます。
スコープ	この規則はどのローカルIPアドレスに一致しますか?: 任意のIPアドレス この規則はどのリモートIPアドレスに一致しますか?: 「これらのIPアドレス」を選択後、「追加」ボタンをクリックして、DPMサーバをインストールしたマシンのIPアドレスを追加します。
操作	接続を許可する
プロファイル	ドメイン/プライベート/パブリックすべてにチェックを入れます。
名前	任意の名前

以上で、DPMで管理するための設定は完了です。

5.2. Windows Server 2008(Server Core インストール)のマシンを管理対象とする

Windows Server 2008(Server Coreインストール)をDPMで管理するため、手動でポートを開放する手順について説明します。

- コマンドプロンプトで以下のコマンドを実行します。
DPM クライアントをインストールした時に自動開放するポートと自動開放しないポートがあります。
以下に記載している DepAgent.exe と rupdsvc.exe は、DPM クライアントをインストールした時に自動開放します。

```
netsh advfirewall firewall add rule name="ICMP Allow incoming V4 echo request" protocol=icmpv4:8,any dir=in action=allow
```

```
netsh firewall add allowedprogram "%windir%\System32\DepAgent.exe" "DeploymentManager(DepAgent.exe)" ENABLE
```

```
netsh firewall add allowedprogram "%windir%\System32\rupdsvc.exe" "DeploymentManager(rupdsvc.exe)" ENABLE
```

以上で、DPMで管理するための設定は完了です。

6. Windows Server 2008(SP1/SP2)/Windows Vista(SP1/SP2)

DPMでWindows Server 2008(Service Pack 1/Service Pack 2)/Windows Vista(Service Pack 1/Service Pack 2)(以降はWindows Server 2008(SP1/SP2)/Windows Vista(SP1/SP2)と記載します。)をインストールした環境のマシンを管理対象とする場合の手順と注意事項について説明します。

ヒント

Windows Vista(SP1/SP2)についての詳細は、以下のサイトを参照してください。
Microsoft Service Pack センター
(<http://windows.microsoft.com/ja-jp/windows/downloads/service-packs>)

6.1. Windows Server 2008(SP1/SP2)/Windows Vista(SP1/SP2)のマシンを管理対象とする

Windows Server 2008 SP2/Windows Vista SP2の仕様によりSP2を適用する条件として、SP1が適用済みである必要があります。(サービスパック適用なしの環境にSP2は適用できません。)

シナリオ実行によるSP2の適用については、以下の1.に注意してください。

自動更新による適用については、以下の1.と2.に注意してください。

1.「3.9.1.1 Windows Server 2003 SP1/SP2の登録」の手順でパッケージを作成する際に「依存情報」タブの「レジストリ条件」に以下を指定したパッケージを作成してください。

キー名: HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Microsoft¥Windows NT¥CurrentVersion

名前: CSDVersion

条件: 存在する

2. 管理サーバに複数のサービスパックのパッケージが登録されていると最新のサービスパックのパッケージを配信します。

サービスパックを適用していない管理対象マシンが存在する場合は、前述のSP2の仕様により、適用されません。

サービスパックを適用していない管理対象マシンにSP2を適用する場合は次の手順で配信してください。

- SP2のパッケージを未登録の場合

SP1を自動更新機能で配信してください。その後にSP2を登録してください。

- SP2のパッケージを登録済みの場合

SP1をシナリオで配信してください。その後にSP2は自動更新機能で配信されます。

Windows Server 2008(SP1/SP2)/Windows Vista(SP1/SP2)の対応方法については、Windows Server 2003 SP1/SP2と同様の対応が必要です。「3 Windows Server 2003 SP1/SP2」を参照し、OS名/サービスパック名を適宜読み替えて作業してください。

7. Windows Server 2008 R2(SP1 含む)

DPMでWindows Server 2008 R2をインストールしたマシンを使用する場合の手順と注意事項について説明します。

Windows Server 2008 R2をインストールしたマシンでは、以下の問題が発生する可能性があります。

- ・ファイアウォール機能を有効にすることで管理サーバと管理対象マシン間の通信ができなくなる。

Windows Server 2008 R2(SP1含む)を管理サーバ/管理対象マシンとする場合は、DPMサーバ/DPMクライアントで使用するポートを手動で開放してください。

ポートの開放については、「7.1 Windows Server 2008 R2(SP1含む)をインストールした管理サーバでポートを開放する」、「7.2 Windows Server 2008 R2(SP1含む)をインストールした管理対象マシンでポートを開放する」を参照してください。

注意

Windows Server 2008 R2(SP1含む)を管理対象とする場合には、以下の注意事項を確認して、ご利用ください。

- ・WinREが第1パーティション以外にインストールされているディスクをダイナミックディスクに変換した場合、WinREパーティションがバックアップされないことがあります。そのバックアップイメージをリストアした場合、WinREパーティションが復元されません。
- ・BitLockerドライブ暗号化が有効になっているマシンのバックアップ/リストアはできません。

7.1. Windows Server 2008 R2(SP1 含む)をインストールした管理サーバでポートを開放する

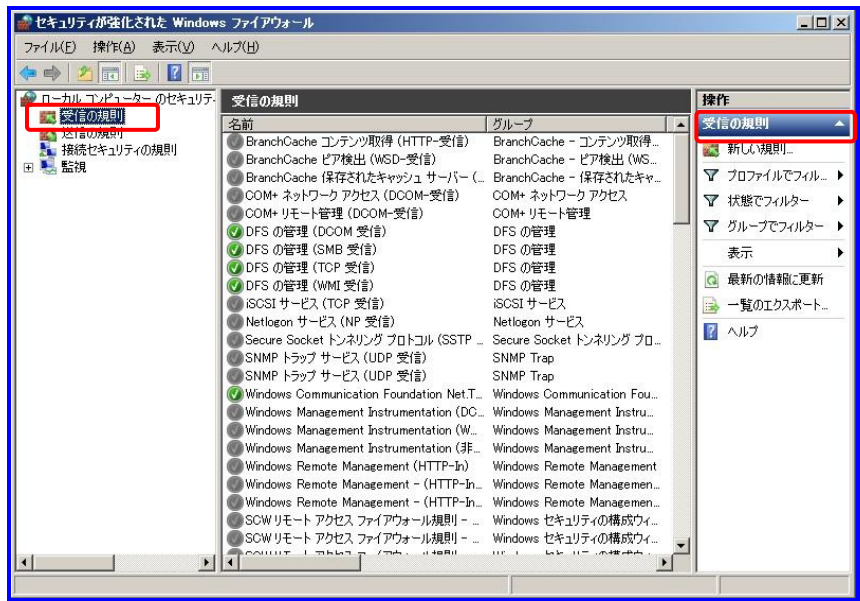
Windows Server 2008 R2(SP1含む)を適用したマシンでDPMサーバを利用する場合は、以下の手順で通信設定してください。

通常、ファイアウォール機能を有効にした状態では、DPMサーバのインストール時に実行される「ポート開放ツール」で、ポートを自動開放しますが、DPMサーバをインストール後にファイアウォール機能を有効にした場合など、管理サーバと管理対象マシン間の通信ができなくなる可能性がありますので、DPMで使用するポートを手動で開放する必要があります。

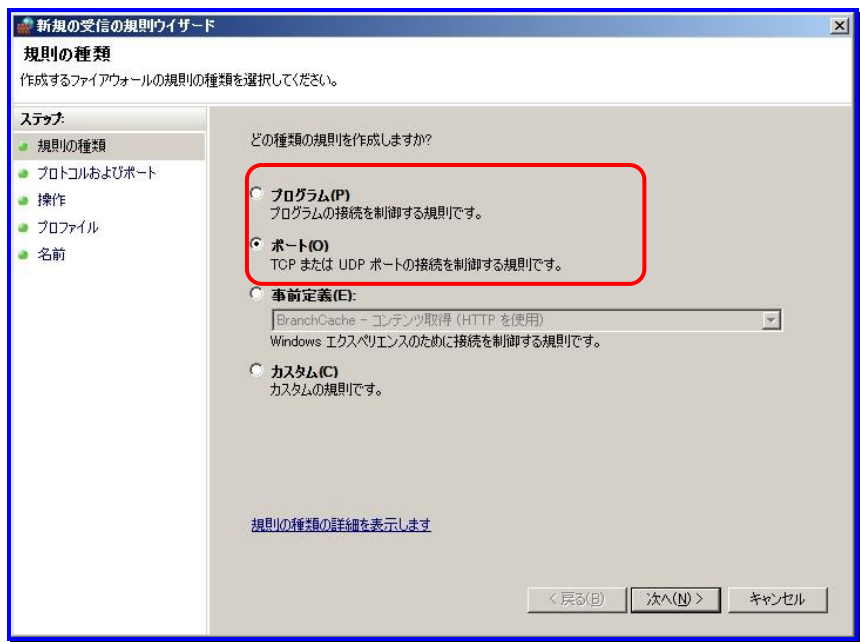
以下にポート開放手順について説明します。

- (1) DPMをインストールしたマシンに、管理者権限を持つユーザでログインします。
- (2) 「スタート」メニューから「管理ツール」→「セキュリティが強化された Windows ファイアウォール」をクリックします。

- (3) 「セキュリティが強化された Windows ファイアウォール」画面が表示されますので、左ペインの「ローカルコンピュータのセキュリティが強化されたWindowsファイアウォール」下の「受信の規則」をクリックします。

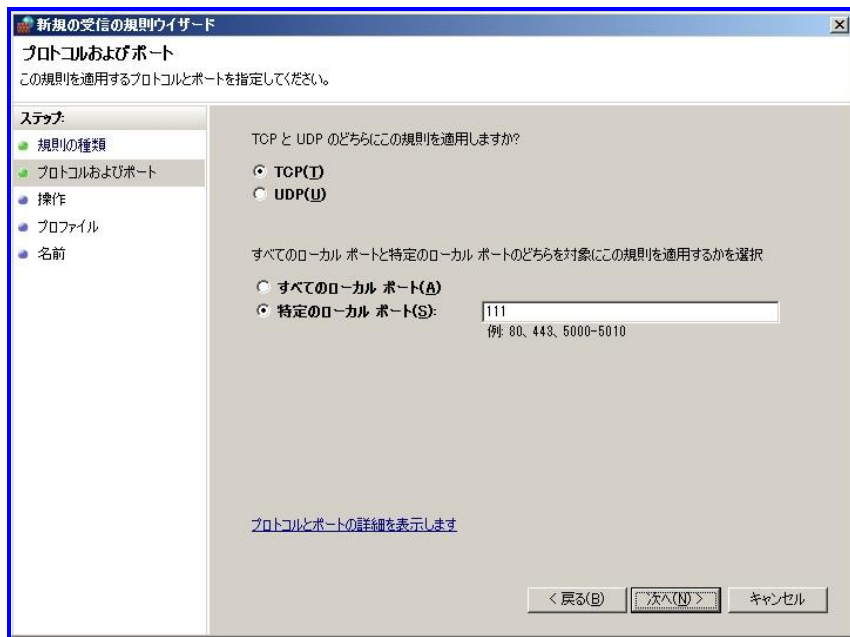


- (4) 右ペインの「新しい規則」をクリックします。
- (5) 「規則の種類」画面が表示されますので、「ポート」、または「プログラム」を選択して、「次へ」ボタンをクリックします。



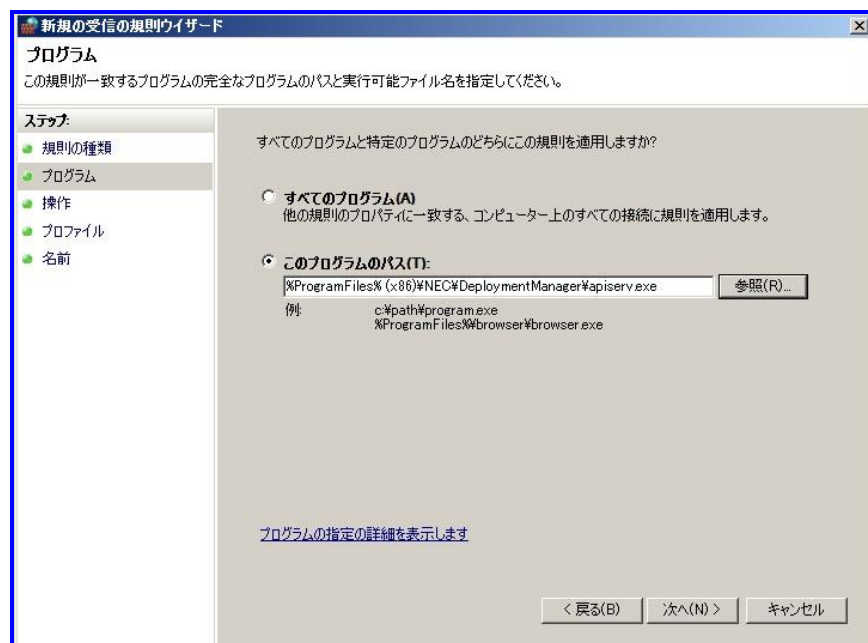
- (6) (5)で「ポート」を選択した場合、「プロトコルおよびポート」画面が表示されますので、下表に記載のポート番号とプロトコルを指定して、「次へ」ボタンをクリックします。

例)TCP:111を追加する場合:「TCP」を選択して、「特定のローカル ポート」を選択した後に「111」を入力



- (5)で「プログラム」を選択した場合、「プログラム」画面が表示されますので、下表に記載のプログラムを指定して、「次へ」ボタンをクリックします。

例)apiserv.exeを追加する場合:「このプログラムのパス」に、<DPMサーバのインストールフォルダ>%apiserv.exeを指定



■ 開放するポート一覧

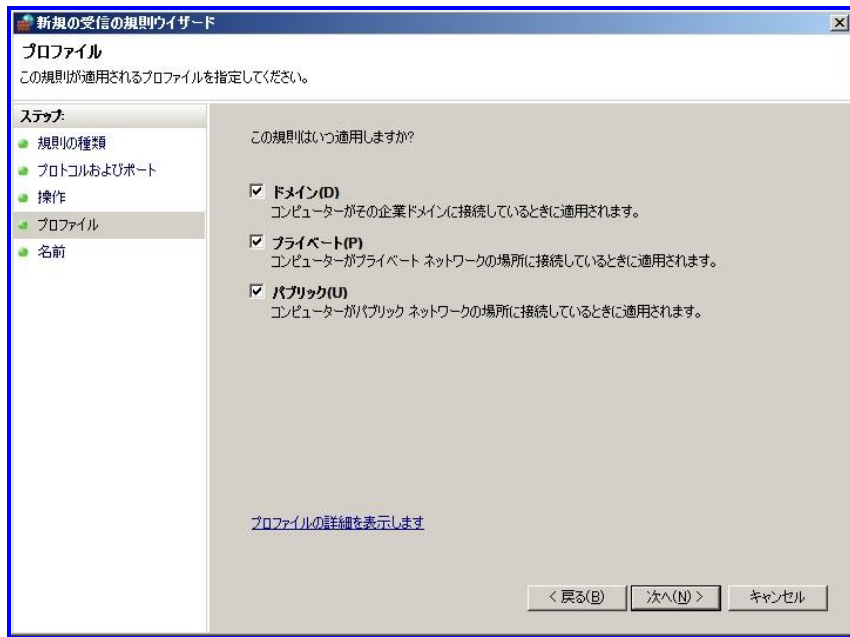
ポート番号/プログラム	プロトコル
67	UDP
69	UDP
80(※)	TCP
111	TCP/UDP
2049	TCP/UDP
4011	UDP
apiserv.exe	TCP/UDP
bkressvc.exe	TCP/UDP
depssvc.exe	TCP/UDP
ftsvc.exe	TCP/UDP
pxemtftp.exe	TCP/UDP
pxesvc.exe	TCP/UDP
rupdssvc.exe	TCP/UDP
schwatch.exe	TCP/UDP

※80(既定値)から変更している場合は、適宜読み替えてください。

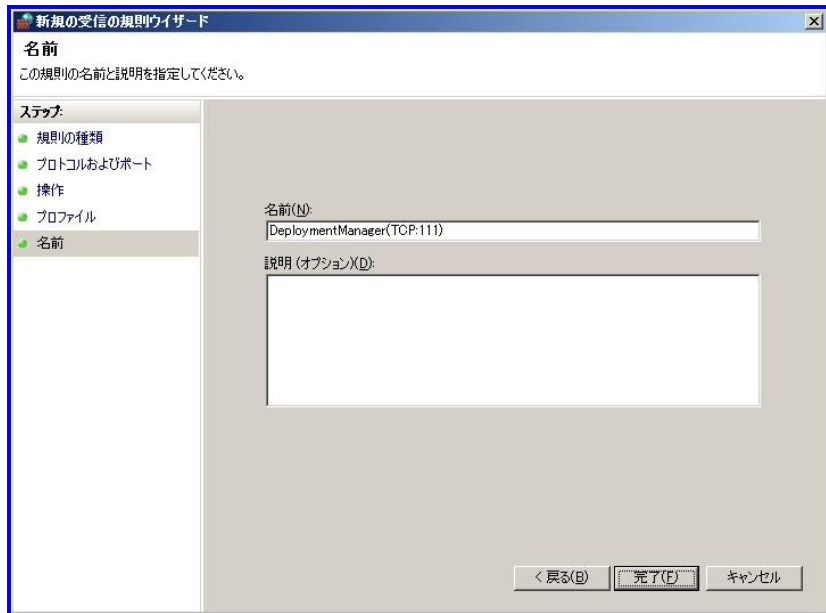
- (7) 「操作」画面が表示されますので、「接続を許可する」を選択して、「次へ」ボタンをクリックします。



- (8) 「プロファイル」画面が表示されますので、適用しないネットワークがあれば該当する項目のチェックを外して、「次へ」ボタンをクリックします。



- (9) 「名前」画面が表示されますので、(5)で「ポート」を選択した場合は、「名前」に「DeploymentManager(プロトコル:ポート番号)」を入力して「完了」ボタンをクリックします。
例)TCP:111を追加する場合:「DeploymentManager(TCP:111)」を入力



- (5)で「プログラム」を選択した場合は、「名前」に「DeploymentManager(プログラム名)」を入力して、「完了」ボタンをクリックします。
例)apiserv.exeを追加する場合:「DeploymentManager(apiserv.exe)」を入力

- (10) 「■ 開放するポート一覧」に記載のすべてのポート番号/プログラムに対して(4)から(9)の手順を行ってください。

以上で、DPMで使用するポートの開放は完了です。

ヒント

コマンドプロンプトからポートを開放する場合は、「■開放するポート一覧」に記載しているポート、またはプログラムごとに以下のコマンドを実行してください。

(下記コマンドは、表記の都合上2行で記載していますが、1行で入力してください。)

・ポートの場合

```
netsh advfirewall firewall add rule name="名前" dir=in protocol=プロトコル localport=ポート番号 action=allow
```

例)

```
netsh advfirewall firewall add rule name="DeploymentManager(TCP:111)" dir=in  
protocol=tcp localport=111 action=allow
```

・プログラムの場合

```
netsh firewall add allowedprogram "DPMサーバのインストールフォルダ¥プログラム名"  
"DeploymentManager(プログラム名)" ENABLE
```

例)

```
netsh firewall add allowedprogram "C:¥Program Files¥NEC¥DeploymentManager  
¥apiserv.exe" "DeploymentManager(apiserv.exe)" ENABLE
```

7.2. Windows Server 2008 R2(SP1 含む)をインストールした管理対象マシンでポートを開放する

Windows Server 2008 R2(SP1含む)をインストールしたマシンでDPMクライアントを利用する場合は、以下の手順で通信設定してください。

通常、ファイアウォール機能を有効にした状態では、DPMクライアントのインストール時に実行される「ポート開放ツール」で、ポートを自動開放しますが、DPMクライアントをインストール後にファイアウォール機能を有効にした場合など、管理サーバと管理対象マシン間の通信ができなくなる可能性がありますので、DPMで使用するポートを手動で開放する必要があります。

以下にポート開放手順について説明します。

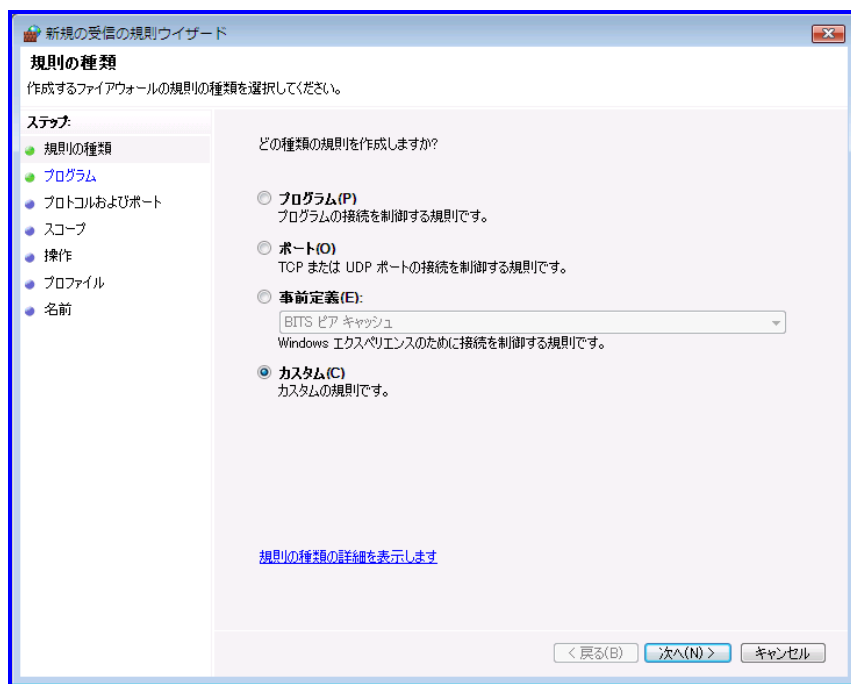
(設定画面については、「7.1 Windows Server 2008 R2(SP1含む)をインストールした管理サーバでポートを開放する」を参考にしてください。)

- (1) DPMをインストールしたマシンに、管理者権限を持つユーザでログインします。
- (2) 「スタート」メニューから「管理ツール」→「セキュリティが強化された Windows ファイアウォール」をクリックします。
- (3) 「セキュリティが強化された Windows ファイアウォール」画面が表示されますので、左ペインの「ローカルマシンのセキュリティが強化されたWindowsファイアウォール」下の「受信の規則」をクリックします。
- (4) 右ペインの「新しい規則」をクリックします。
- (5) 「規則の種類」画面が表示されますので、「プログラム」を選択して、「次へ」ボタンをクリックします。
- (6) 「プログラム」画面が表示されますので、下表に記載のプログラムを指定して、「次へ」ボタンをクリックします。
例)DepAgent.exeを追加する場合:「このプログラムのパス」に、<DPMクライアントのインストールフォルダ>¥DepAgent.exeを指定

■ 開放するポート一覧

プログラム	プロトコル
DepAgent.exe	TCP/UDP
rupdsvc.exe	TCP/UDP

- (7) 「操作」画面が表示されますので、「接続を許可する」を選択して、「次へ」ボタンをクリックします。
- (8) 「プロファイル」画面が表示されますので、適用しないネットワークがあれば該当する項目のチェックを外して、「次へ」ボタンをクリックします。
- (9) 「名前」画面が表示されますので、「名前」に「DeploymentManager(**プログラム名**)」を入力して、「完了」ボタンをクリックします。
例) DepAgent.exeを追加する場合: 「DeploymentManager(DepAgent.exe)」を入力
- (10) 「■ 開放するポート一覧」に記載のすべてのプログラムに対して(4)から(9)の手順を行ってください。
- (11) 「セキュリティが強化された Windows ファイアウォール」画面に戻りますので、右ペインで「新しい規則」をクリックします。
- (12) 「新規の受信の規則ウィザード」が表示されますので、以下の情報を入力します。
(以降の手順で設定する情報は参考値であり、環境により変更が必要な場合があります。)



ステップ	選択する内容
規則の種類	カスタム
プログラム	すべてのプログラム
プロトコルおよびポート	プロトコルの種類: ICMPv4 インターネット制御メッセージ プロトコル(ICMP)の設定: 「カスタマイズ」ボタンをクリックすると「ICMP 設定のカスタマイズ」画面が表示されますので、「特定の種類のICMP」で、「エコー要求」にチェックを入れます。
スコープ	この規則はどのローカルIPアドレスに一致しますか?: 任意のIPアドレス この規則はどのリモートIPアドレスに一致しますか?: 「これらのIPアドレス」を選択後、「追加」ボタンをクリックして、DPMサーバをインストールしたマシンのIPアドレスを追加します。
操作	接続を許可する
プロファイル	ドメイン/プライベート/パブリックすべてにチェックを入れます。
名前	任意の名前

以上で、DPMで使用するポートの開放は完了です。

8. Windows 7(SP1 含む)

DPMでWindows 7(SP1含む)をインストールしたマシンを使用する場合の手順と注意事項について説明します。

Windows 7(SP1含む)をインストールしたマシンでは以下の問題が発生する可能性があります。

- ・ファイアウォール機能を有効にすることで管理サーバと管理対象マシン間の通信ができなくなる。

Windows 7(SP1含む)を管理対象マシンとする場合は、DPMクライアントで使用するポートを手動で開放してください。

ポートの開放については、「7.2 Windows Server 2008 R2(SP1含む)をインストールした管理対象マシンでポートを開放する」を参考にし、通信設定してください。

注意

Windows 7(SP1含む)を管理対象とする場合には、以下の注意事項を確認して、ご利用ください。

- ・WinREが第1パーティション以外にインストールされているディスクをダイナミックディスクに変換した場合、WinREパーティションがバックアップされないことがあります。そのバックアップイメージをリストアした場合、WinREパーティションが復元されません。
- ・BitLockerドライブ暗号化が有効になっているマシンのバックアップ/リストアはできません。

9. Windows Server 2012/Windows 8

DPMでWindows Server 2012/Windows 8をインストールしたマシンを使用する場合の手順と注意事項について説明します。

Windows Server 2012/Windows 8をインストールしたマシンでは、以下の問題が発生する可能性があります。

- ・ファイアウォール機能を有効にすることで管理サーバと管理対象マシン間の通信ができなくなる。

Windows Server 2012/Windows 8を管理サーバ/管理対象マシンとする場合は、DPMサーバ/DPMクライアントで使用するポートを手動で開放してください。

ポートの開放については、「7.1 Windows Server 2008 R2(SP1含む)をインストールした管理サーバでポートを開放する」、「7.2 Windows Server 2008 R2(SP1含む)をインストールした管理対象マシンでポートを開放する」を参考にし、通信設定をしてください。

注意

Windows Server 2012/Windows 8を管理対象とする場合には、以下の注意事項を確認して、ご利用ください。

- ・WinREが第1パーティション以外にインストールされているディスクをダイナミックディスクに変換した場合、WinREパーティションがバックアップされないことがあります。そのバックアップイメージをリストアした場合、WinREパーティションが復元されません。
- ・BitLockerドライブ暗号化が有効になっているマシンのバックアップ/リストアはできません。